
恋姫無双で就職中！

倉屋敷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双で就職中！

【Zコード】

Z5248Z

【作者名】

倉屋敷

【あらすじ】

高額なアルバイトありますとの謳い文句にほいほい釣られてしまつた主人公、倉屋敷直衛は流されるままに流されて契約書に押印をしてしまつ。悲しいこと（？）にその契約書は新世界への旅立ちへの許諾証であり、直衛は異世界である恋姫無双の世界へと飛ばされてしまつ。

第一話 日当3万+出来高払い

「お、そこの辛氣臭そうな顔したお兄さん、いいバイトがあるよ？
ちょっと聞いていかないかな。日当3万+出来高払いの優良アルバ
イトだよ？」

と、大学からの帰宅途中に如何にも怪しげなおじさんに話かけられ
た。

辛氣臭そりで悪かったな！

「ちがうとこ、もう一ヶ月だつていうのに就職先も決まってないんだ
よー。

辛氣臭い顔してるに決まってるだろ！

「んー、そんな怪しそうな顔をしないで。バイト代があからさまに
高額過ぎるのが気になつているんだろう？それも当然、もうクリス
マス間近だからね、人手不足もいいところなんだよ！だからこそ、
高額で、且つ暇そなあ兄さんに声かけしているわけなんだけど」

クソ！

気にしている」とばかり言いやがつて。

確かにクリスマスには予定はない！

今年も今年でクリスマス爆発しうつていう係りだから俺は！

だけど、暇なのは事実だし、バイト代が高額なのも事実。

癪に障ることばかり言っていたが、これはこれでいい臨時収入になるか。

「お兄さん乗り気だね？いい顔になってきたよ。作業内容は現場についてからでいいかい？まあ、バイトだから上の指示に従つて汗を流してくれればいいだけなんだけね」

ん？作業内容がいまいち分からないな。

クリスマスに関することだから、たぶんケーキを作つたり、なんなりだとは思つただけビ。

もしかしたら、商品の売り子？

いやはや、辛氣臭い顔の奴に売り子はさせないから、やっぱ単純作業か力仕事のどちらかかな？

何はどうあれ、バイトにさせる内容は単純なものであらうから気にしなくていいか。

「お兄さんがこのバイトをどう捕らえているかはわからないけど、慣れれば大したことはないよ。一日でも過ぎたら嫌でも理解できるはずだからね。はい、やるという方向で問題ないのならこの紙に必要事項を書いてね」

まだ何も答えてないのだが、名前だとか住所だとか雇用契約用の用紙を渡された。

相変わらず雰囲気に流されやすい性格だなあと実感。

とりあえず、記入してみようか。

それはいいんだけど、こんな冬空の下、バインダー片手に何故書かないといけないんだ。

先に現場につれていって貰おう。

「そうそう、氏名、年齢、住所・・・あとは給与の扱いかな？一括払いがいいか即日払いがいいか。他には・・・ああ、裏面にアンケートがあるからそれにも答えてくれると嬉しいかな？なくてもいいんだけどね」

給与があ・・・一括なら一度に大金を手に入れれるし、即日も即日で悪くない。

けど、一括払いの方がお年玉っぽくていいかな？

それで、これがおじさんと言われたアンケートか。
なになに・・・

【貴方を三国志の武将に例えたとき、その能力値はどの程度でしょうか。300ポイントを、武力、統率、知力、政治、魅力に振り分けてください】

んーこれって何もバイトに関係のことだよね？

だから答えてくれると嬉しいとか、そういうことなのか。

「のおじさんの上の人」が、三国志好きなのかな？

俺も好きだけじゃ。

それで、能力の振り分けか。

300ポイントってことは平均値にすると60な訳だけど、流石にそれは安直過ぎるかな。

かといって、極端にしようも・・・悩むなあ。

「うつこつときは自分の好きな武将を参考にするのがベスト。

俺は、典韋とか張任とかの義理深い武将が好きなんだよね。

忠誠を誓つて主君の為に戦つたついで、なんというかかつこいこいよね。

とこうわけで、

【武力・100 総率・1 知力・98 政治・1 魅力・100】

にしました。

だって、こういったオリジナルの新規武将ってのは自分の理想を現実に投影している訳でしょう？

俺には、兵を統率するなんていうことはたぶん無理だと思つ。

政治も無理かな？閃き！つていうのはいいと思うけど、政治って所謂知識でしょ？

勉強はあまりとくいな訳ではないんだよね。

だから、直感で戦う戦闘狂みたいな感じでこの能力振りに！

魅力を限界まで振ったのは言わずも・・・クリスマスに独り身は辛いよ？

それで、次の設問は

【仮に、何でも願いが叶うとした場合、貴方が叶えたい願いとは何かお答えください】
ん？なんだこれは？

「お兄さんもその設問で躊躇しますか。その設問は、単純に一つ願いが叶うならば、と考えれば良いです。前に記入していただいた方は、金銀財宝が欲しいとか、新世界の神になりたいとか、魔法が使えるようになりたいとか、そういうことを書かれていましたね」

つまり、欲望や中二病の類をここに書けというわけか。

いや、自分のそういうた部分をこんな場所に書くとかおかしいだろう？！

まあ、書くけどさあ。

【D i e s I r a e の 戰雷の聖劍が欲しい】

書いた！書いてしまった！

これは恥ずかしい！

「失礼ですがお兄さん、このD i e s I r a e の 戰雷の聖劍スルーズ ワルキューレとは何かを私に説明していただけますかな？」

げつ？！

なんでそんな恥ずかしいことを・・・ええい、既に書いてしまった後なのだ、今更何を戸惑つことが！

「ええーっと、D i e s I r a e っていうゲームに出てくる武器のことだよ。人の魂を使って超常的な力を振るつたり、自分の願い通りの異世界を創りだしたりすることができる・・・んだ」

あああああ、書くんじゃなかつた！

これは恥ずかしい！公開処刑つていうんじゃないのかこれは！

「なるほどなるほど、では、お兄さんは人を殺したいのですか？消費するものが人の魂である以上、それは避けられぬことだと思いますが」

「そういうわけではないけど・・・もしも、もしも中世のファンタジー的な要素のある世界なら、戦争もあるだろうし、積極的とまではいかなくてもそういう状況になるだらうからだ」

「ふむ、つまりお兄さんは人殺しになりたいのではなく、そつ、なんといつか英雄のよくなものに憧れないと、そういうわけですかな？」

「んー、英雄とはちょっと違うんだけど。なんといつか、騎士といふか、義理深い存在に憧れてるんだよね。他者の為に身を捧げて行動するような、そんな存在にこそ」

「ははあ、なるほど。それはそれは大層立派な夢ではないですか。いこうじだと思つまよ、私は」

今日出会つたばかりのおじさんと中一病な会話を繰り広げてしまった。

しかも理解までされている・・・死にたい。

「では、結構な時間が経ちましたので、アンケートはそれぐらいくして後は判子だけ押してもらひますか？」

判子？判子は流石に持ち歩いていないぞ。

「ああ、無ければ、この朱肉に親指を押し当てる、拇印でも結構です」

拇印でもいいのか。

まあ、おじさんがそれでいいといつのであれば拇印で済ませるナビ・

・

「これでいいかな？」

「結構でござります。それでは今から現場へを」案内しますのであ
ちらの車に・・・」

おじさん指し示した方を見ると確かに車がある。

これに乗ればいいってことなのかな?

だけどこれって、工事現場とかで使つ車両なんじゃないかな?

つてことは、作業内容は工事現場での力仕事っていうわけ?

「・・・あちらの車に轢かれてください」

はつ?
9

と、聞き返そうとしたときには、既に車に轢かれて意識も・・・

第一話 新世界へ

「・・・あれ？俺はさつき車に轢かれたような

よつなではなく、確かに轢かれたはずだ。

大学からの帰宅途中に変なおじさんに話しかけられて

アルバイトの勧誘をされて、そして轢かれた。

「いや、確かに轢かれて死んだよつな氣がするんだけど・・・ってー！」

車に轢かれて死んでいるなら意識はないはず？

まあ、これは推測だけどさ、死んだことがないから。

生きてこらのなら、治療の為に病院にいるはずだろ？

まあ、もしかしたら数ヶ月意識を失っていたのなら

それはそれで家なり病院なりのベッドで寝ているはず。

だけど

「荒野だな。紛つひと無き荒野だ。まつ？！なんだこれは、ビリーフ

おこおこ、しれはびうつことだ。

田覚めたら荒野とか、現実的に有り得ん話だろ。

「つて、待てよ。もしこれが死んだ後の天国とかなら……」

と、呟いてそれがないと理解した。

大学帰りの服装に、べつとりと血のあとが付いている。

つまりは、ねじさんと出会ったことも、車に轢かれたことも事実。

そして気が付けば荒野にいるという現実だけが残される。

「はあ……こんなことになるなりねじさんの話を聞かなければ良かった」

まつたくもつてその通りだが、時既に遅く、後悔先に立たず。

「どうあえず、俺は俺のせいで荒野にいるということわけか。で、どうしようか。ずっとここにいても餓死するだけだろう……とりあえず、今何を持っているかの確認だな」

鞄の中には……何も入っていない。

いや、入っていない」ともないが、空のクリアファイルが一つあるだけで他には何も無い。

「そういうえば、懶々休日なのにレポートを出しに着たんだよな。何も入っているわけ無いか」

鞄を逆さまにして振つても何も出でくるものは……あつた。

「ん、なんだこれは。こんなもんを入れた記憶なんてないが……説明書？」

何も入つてないはずの鞄の中から、見るからに怪しい説明書と書かれたものが出でてきた。

「説明書、説明書ねえ。なんの説明書だ？」

怪しいことは承知の上で、とりあえず開いて見る。

「倉屋敷直衛様専用説明書？えーっと、目次は……貴方の置かれた状況、この世界について、チュー・トリアル……おい！10ページしか中身がないぞ！後は全部余白かよ！」

説明書には自分の名前が書かれていた。

目次の内容は、今の境遇を説明してくれるものなのだろうか

少なくとも、必要不可欠な内容が記されているに違いない。

少しでも情報を得る為に読み進める以外に無いか。

「なになに・・・直衛様へ、本契約書への押印、誠にありがとうございます。さつそくですが、貴方様の置かれた状況について説明させていただきます」

「貴方様は弊社との契約に基づき今その場にいます。具体的には、

「貴方様」自身が説明していくださったように、ファンタジー溢れる世界にて騎士の如き活躍ができる舞台を用意させていただきました」

「貴方様との間に交わされた契約は、貴方様の願いを叶えるというものであり、弊社はそれを積極的にそして否応なしに叶えています。故に貴方様は現在、荒野にお立ちになれ、途方に暮れているものかと思います」

「ですが、これも貴方様が真に望んでいることでありまして、弊社への苦情はお断りしています。何卒、ご理解の程、よろしくおねがいします」

いやいやいや・・・そりゃあ確かに、そりだつたらいいな。

とか、そんなことまいったたけどかー！

実際になるとは思つて無かつたよ！

思つてたらもうと別のことを言つてただひつじ・・・

ああ、なるほど。

それも含めて真に望んでいるといひとか。

なら、これもまた仕方が無いのか？

うーん、とりあえず読み進めるとするか。

「さて、自身の状況についてご理解なされたと思いますので、この世界についての説明をさせていただきます。この世界は、恋姫無双

「知らなかつた場合の簡易的な」説明として、歴史的に有名である三国志の武将のほとんどが女性に置き換わつた世界であります。これもまた、貴方様の「希望通り、クリスマスに独り身は寂しい」という願いを考慮して創らされていただきました

「当然のことですが、この世界では以前の世界のように平和などといつ言葉はありません。群雄割拠、戦乱の時代であるといつても過言ではなく、これもまた、貴方様の望んだ通りの世界であると思われます」

「従いまして、貴方様の願いである、騎士になりたいという願いを叶えるに相応しい世界となつていますので、御存分に夢を叶えていただきたい思います」

御丁寧に「どうもありがとうござります……って言つてでも思つたか！」

三国志ってあの三国志だろ？

・ ゲームの三国無双にもあるよつて、武将が雑兵を蹴散らしていく・

うわあ、これは死んだだろ。

俺が好きなのはアクション系の三国志じゃなくてシミュレーション系の三国志なんだよね。

まあ、歴史を知つてると、三国志はかなりのアドバントージにな

るな。

だけど、なんだっけ？恋姫無双？

それについてはちょっとわからんな。

武将が女性化なんだろう？

毛むくじやらでガチムチな女とか勘弁願いたいのだが・・・

「注意事項と致しましては、貴方様の実力は前の世界の実力ではなく、貴方様がアンケートに書き込んだ実力となります。くれぐれも注意してください。統率が1なので兵を率いたとしても鳥合の衆がいいところ、また政治が1なので恐らく人の名前を覚えるのにも苦労するでしょう」

「しかし、武力が100である為に向かうところ敵なし、知力が98という値であり、そうそう罷に掛かるのではないでしょ。それに加え、魅力が100となっていますのでフラグの建築には暇が無いでしょ。刺されないように注意してください」

「他の注意事項としては、この世界は三国志がベースとなっている為に名前の表記が以前の世界と違います。姓、名、字、真名といった項目があり、特に真名というものは、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く真名で呼びかけることは、問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に値します。くれぐれも気をつけてください」

今更だけど、武力を100にしておいてよかつた。

これを何の気まぐれか武力を一人でもしておいたら賊に殺されてしまうの終わりだつたはず。

「ほいほいと契約書に押した俺だけ、これだけはグッジョブだつたなあ。

んー、それと名前か。

流石に倉屋敷を姓名字に当てはめるのは難しいだらうし、惜しいけど名は変えようかな？

三国志で何か適當な武将を・・・胡車児でいいか。

本当は典韋とかのがいいんだけど、何故か典韋を選んではいけないよつな気がする。

だから、ここには典韋の宿敵となる胡車児でいらっしゃあ・・・と。

姓は胡、名は車児、字は・・・無い。

真名はそのまま直衛でいいか。

「最後に、貴方が望んだ Dies Irae の 戦雷の聖剣についてです。こちらの方に関しては、形成位階までの開放を行っています。創造位階以降はご自身の渴望を良くご理解された上で自己解放となっています。故に、貴方さまが御成長しなければ発動できません」

ん?となると形成は可能というわけか。

後で試して見よ。

にしても、聖遺物が使えるつてことは

俺は不老不死なのか？

他に聖遺物を有している者はいないだろ？、事実上の無敵モード
とこうやつか。

「しかし、戦雷の聖剣スルーズ ワルキューレは宝剣の類であり、王族でもない者が所持をしていると不信がられます。くれぐれも、使用に注意してください」

ですよね。

まあ、短剣でも構えて攻撃範囲を誤魔化して使うとじょう。

活動段階の聖遺物は、不可視の斬撃を放つことができるわけだし、

そういう小細工にはつってつけかな？

「それでは、準備がよろしければチュートリアルに移らさせていただきます。説明書を地面に叩きつけると音声ガイダンスがスタートします。ただし、一度叩きつけると一度と説明書が開けなくなる為、十分に理解した上で行ってください」

チュートリアルしたら説明書読めなくなるとか、なんだこの不親切な設計は。

まあいいや、現状は理解したわけだし、とっととチュートリアルを・

「クソッタレー！よくも願いを叶えてくれやがったな！」

と、叫んで説明書を叩き付けた。

第三話　主人公紹介と用語説明（前書き）

能力値に修正を施しました（第十一話時点）

第三話 主人公紹介と用語説明

説明書

本編より説明書の記事の方が容量が大きい。なんということでしょう。

【人物紹介】

(1) 元いた世界の名前

姓 : 胡
名 : 倉屋敷
名 : 直衛

(2) 恋姫無双の世界の名前

姓 : こ
名 : 車児
字 : -
真名 : 直衛

年齢は22歳

(3) 風貌

元の世界では冴えない人物であった。
が、恋姫無双の世界では魅力100ということもあり、一級のフランク建築士ができる存在である。

(4) 能力

武力 : 100 + (0) = 100

武将としての最高峰。後に説明する聖遺物も考慮すれば武神という

に相応しい。

彼が戦場で死ぬようなことはなく、死ぬとするのならば主を失ったときだけだろう。

$$\text{統率} : 1 + (- 0) = 1$$

誰も彼の言葉に耳を傾けてくれない。

兵は指示を聞かず自ずから動き回り、見事なまでの鳥合の衆と化す。魅力の値によつて補正を受ける。

$$\text{知力} : 98 + (- 0) = 98$$

智謀に長けている。

が、実経験がなく机上論となり易い。

経験を積むことで生きてくる数値である。

$$\text{政治} : 1 + (- 40) = 41$$

無知蒙昧

ただし、以前の世界での言葉は知っている。
基本的に以前の世界を基準に考えることが多く、恋姫世界の原理とすりあわないことがままある。

が、相手の政治力が高ければ十分に伝わらずとも理解される。

$$\text{魅力} : 100 + (- 0) = 100$$

カリスマ、誰もが彼に目を惹かれる。

求心力は盲信を生み出し、災厄となることもある。
何も考えずにフラグを積み立てれば刺されるのみ。

まとめ

$$[\text{武力}] : 100$$

$$[\text{統率}] : 1$$

$$[\text{知力}] : 98$$

$$[\text{政治}] : 41$$

$$[\text{魅力}] : 100$$

ただし、能力値は年齢によつて増減がおきる。

歳をとれば衰え、また若い内は能力値を上げることが容易であるが・

・

彼は不老不死である為、衰えることはなく成長するのみである。
委細は後述に示す。

(5) 所持品
スルーズ ワルキユーレ

戦雷の聖剣

形態は武装具現型。位階は創造。発現は求道型。伝説通りの神話の武器ではないが、フリードリヒ3世の宝として保管されていた高い靈格の聖遺物であり、電撃を使った攻撃が可能である。

だが、主人公である直衛は一時的に制限がかけられており、位階は形成段階に留まる。

また、聖遺物である戦雷の聖剣スルーズ ワルキユーレを有している為、直衛は不老不死である。

【聖遺物】

人の思念を吸収することにより、絶大な力を持つ様になつたアイテムのこと

聖遺物を扱うためには永劫破壊エイヴィヒカイトと呼ばれる理論が必要である。
作中で主人公である直衛が扱う戦雷の聖剣スルーズ ワルキユーレもその一つ。

【永劫破壊】

(1) 永劫破壊エイヴィヒカイト

聖遺物を扱うためには、永劫破壊エイヴィヒカイトと呼ばれる理論が必要。これは

発動に人間の魂を必要とし、使うには常に人間を殺し続けねばならない。殺せば殺すほど強くなつていき、殺した数に相当する靈的装甲を常に纏つよつになる。

しかし魂にも質が存在し、単純な量だけではなく、戦士や殺すことと躊躇する相手の魂ほど質が高く、質と量の両面を兼ね備えるほど効率的に強化される。**永劫破壊**を操る者は聖遺物によつてしか倒すことが出来ず、それ以外の手段での攻撃は一切通じない。聖遺物による攻撃は、物理的・靈的の両面で防がなければ防ぐことは出来ない。

また喰らつた魂に相当する生命力を得ているため、仮に肉体的損傷を受けてもすぐさま再生される。聖遺物を破壊されない限り、エイヴィヒカイトの使い手は不老不死であるが、逆に聖遺物が破壊された使い手は死亡する。

作中では、直衛以外に**永劫破壊**を扱える者は居らず、故に彼が死ぬ方法は自殺以外にない。

(2) 永劫破壊の位階

永劫破壊には4つの段階がある

【活動】

初期段階 限定期に聖遺物の特性を使用できる

刀剣あるいはそれに順ずるものの場合、不可視の攻撃をすることができる

身体能力はこの段階で既に遙か人外の領域

例：時速数百キロの速度で行動が可能であつたり、その拳は容易に鉄柱を損壊させる。

【形成】

聖遺物を具現化できる

例：刀剣の類であれば、刀剣自体が不可視の状態から具現化される。五感や靈感が超人化し、破壊と戦闘を高次元することが可能

【創造】

切り札であり必殺技

使い手の渴望に従つた都合のいい世界を創造する

大きく分けて二種類ある

【霸道型】

創造の一途 術者の周囲の空間を異界に変える、他者を食い潰して進む道

異界に取り込む人が増えることで効果が薄まるが、聖遺物使いでなければどれだけ飲み込んでも影響は無いに等しい

【求道型】

創造の一途 術者自身を異界として肉体変化や特殊能力を付与する自分一人で突き詰めていく道であるため、他者の影響を受けない

【流出】

エイヴィヒカイテ
永劫破壊の最上位階。

霸道型である場合創造の異界を永続的に全世界に流れ出させ、既存の世界法則を塗り替える。

求道型の流出は、術者自身が世界の理から外れた完全永遠の存在となる。

つまりぼっち。

エイヴィヒカイテ
(3) 永劫破壊の武装形態

人器融合型

肉体を聖遺物と融合させる。攻撃力に特化し、全タイプ中最高の身体能力を發揮する。しかし聖遺物との同調率が高くなるほど極度の興奮状態となつていき、理性的に判断することが困難になる。そのため、爆発力は高い反面、格下から足をすくわれ易いタイプでもある。性格としては好戦的で破壊的な者、刹那主義者や享楽主義者などになりやすい。聖遺物は、拷問や処刑に使用され、怨念を餌にした物が大半。

武装具現型

聖遺物を刀剣などの武器として扱う。基本形でありバランス面で優れ、特筆すべきメリットもデメリットもない。突出した点も穴もない特性上、実力以上の力は發揮できないため、未熟な者は決定力のない器用貧乏だが、強い者は万能となり隙がなくなる。主従関係がはつきりしているため暴走・自滅の危険性が低い。性格としては職業的な戦闘訓練を受けた者、現実主義者などになりやすい。聖遺物は、武器・兵器などの戦闘における道具として使用され、血を吸つた物が大半。

主人公である直衛はこのタイプ。

事象展開型

魔術や呪術のような働きをする。物理的破壊の顕現ではないため攻撃力は低く、中には攻撃力が皆無の者もいるが、反面防御や補助に優れており、殺すことが困難。融合型と組んだ場合は非常に危険。性格としては理知的で聰明な者、探究心と神経質な拘りを持つ者など、学者・芸術家タイプの者がなりやすい。聖遺物は、書物や芸術品など、作者の狂的な情熱を餌にした物が大半。

特殊発現型

上記のいずれにも属さないか、または複数の性質を持つ。他を上回る強大な力を發揮することもあれば、状況次第では全く役に立たない

いこともあるなど、非常に不安定なタイプ。性格としては特定の物事や人物に囚われて盲目的になつてゐる者、純度の高い宗教家や復讐者がなりやすい。聖遺物は、質の浄不浄に関係なく、信仰を餌にした物が大半。

第四話 チュートリアル

「それではチュートリアルをスタートします。ここより北西に5里向かつたところに山賊にならうかならないか迷つて居る方が3名いらっしゃいます。その方々を殺戮ないしは恫喝して、衣類と金品を奪つてください」

「おおおおー！」

さつそく凄い音声が流れ出した。

「んにちわ、死ね！ も、いいところ過ぎるだろ？」

「現在の胡車児様の服装はこの世界では極めて異例であり、不審がされること間違いなしです。従つて、至急この世界での服装を整える必要があります」

「また、聖遺物のお陰で不老不死であることは間違いないのですが、金品が無ければ食事取ることも、宿に泊まることも出来ません。この世界で信用を勝ち取るには金品は必須です。見ず知らずの者が無銭で現れようものなら、そのものは賊と判断されても文句は言えません」

「やつて聞くと、かなり厳しい世界だと言え。」

出会つた人をまず疑つてからなければならないというのは、以前の世界でも他称なりともあつたはずだけど、即座に賊と判断されることはなかつた。

だからこそ、疑われない為に金品を所持すると言つのは理解できるのだが・・・

「胡車児様の目標は主に仕える忠実な騎士であり、清廉潔白な英雄ではあります。躊躇することなく実施してください。略奪後、更に北西に7里向かったところに陳留と呼ばれる都市があります。そこを拠点に暫く大陸を回ると良いでしょう」

確かに、確かに俺自身が潔白である必要はない。

むしろ泥を被り、後ろめたいことを主にやるべきではないだらうか？
自身を省みずに行動するといふことが、騎士の在り方・・・という
わけでもないだらうが、俺自身が望んでいるのは結局そういうしたものだらう？

ならば、悩む必要はなく、即座に決めるべきなのだが。

殺戮か洞窟

気に掛かつてこむことは殺すと言つこと。

平和な世界で過ごしてきた俺にとって、人を殺すといふことは極めて重い。

が、これも運命か。

どの道避けられぬ結果であるのなら、避けては通らず突き進むのが吉。

慣れたいとも思わないけど、慣れる必要もあるだらつから。

「「J」へ、冷酷に考えることができるのも知力を無理に上げたせいな
のかな」

「いいえ、胡車児様は優柔不断な方ではござりませんでしたから・。
・ですが、知力に極振りを行つたことにより、多少の影響があつた
ことは否定できません」

「うお！会話が成立している！ただの音声ガイドダンスかと思つたら
以外に出来るな」

「チュー・トリー・アル終了まではある程度の会話は出来ます。他に何か
お聞きになられることはありますか？」

「なら、「J」の世界には俺のように契約によってきたものはいるのか
？またそれに準じるもの」

「「J」の世界は胡車児様の為の世界であるため、他の契約者は存在し
ていません。ただし、「J」の世界の構成上、外部から来たという設定
である男性がそれに該当する可能性はあります」

「つまり、ゲームとかでいうところの主人公ってやつになるのか？」

「はい、北郷一刀という名の高校生がその主人公に値します。です
が、胡車児様の世界でいう一般的な高校生の性能しか持ちませんの
で、驚異的ではないと思われます」

なるほどねー

まあ、そういう存在もいるにほいるといふことか。

「北郷一刀君は悲惨だね。ただの高校生でありながら、何の力も持たずに三国志の世界に来るなんて・・・直ぐに死んでしまうのではないか?」

「北郷一刀にも若干のハンデがあり、開始早々に死ぬことはありません。必ずどこかの勢力に拾われて生きると言つ運命になつています。しかしながら、その後のことは北郷一刀次第ではありますガ」

「生身で生きていられるだけ十分だと、そう思つんだけどね。んー、とりあえず聞くことはこれ以上ないから山賊になりそうな方々の場所にいひつとしようか。で、どれくらいで着くのかな?」

「恐らく、全力で向かえば1分以内かと。胡車児様は聖遺物をお持ちですから、容易に時速数百キロで走れます上に、雷の適正をお持ちです。したがつて、最終的には秒速200キロを優に超えることになります。ですからぐれぐれも・・・」

「はいはい、誰かが見ている前ではそんなことはしません。といふか、秒速200キロとか見えるのか?とは思つけど」

「ちなみに、チユートリアル中の行動は誰にも見られませんから御安心を。これはあくまでチユートリアルですからね」

「それはいいことを聞いた。なら、全力で向かうとするか」

「そういえば一里つてどれくらいの距離だつたっけか。

確かに日本での一里が4キロくらいで・・・中国の単位はそれは8分の一くらい？

それであつてるなら400メートルくらいのはず・・・

山賊がいるのは5里先だから、2キロ先になるといつわいか。

分速2キロだとしたら、時速120キロの速度で走れるといつわいだが。

んー、いまいち実感がわかないな。

「悪いけど、5里をどれだけで走れるか計つてみたいんだ。時間の計測を頼めるか？」

「お任せください。それもチュートリアルの内です。全力で駆け抜けて実力をお測りになるのがよろしいかと」

「よし、なら駆け抜けてみるか」

投げ捨てた説明書を拾い上げ、北西へ駆け出す。

「うああああ！なんて速さだ！自動車よりも早いんじゃないか！？」

俺は別に陸上選手だったわけでもない、ただの帰宅部員だったのだが・・・

この適当な走りですらこの速度、確かに一分以内に着けそうだ。

感動しているのも束の間、目の前に山賊らしき三人組みを見かけて

足を止める。

「へえ、車は急に止まれないとかいりうけど、俺は急に止まれるんだな」

「むしろ止まれなかつたら欠陥品だと思いますけど・・・ちなみに、5里を駆けるのに掛かつた時間は30秒ですね」

となると、5里＝2キロだから、分速4キロの時速240キロか。

人間じやないな。やつぱり聖遺物使いつて人間じやないなあ。

「アニキ！人が！突然人が現れました！」

「てめえ、そんな訳ねえだろ。人が突然現れるなんて・・・うおあ？！」

黄色い布を被つた三人組みと遭遇・・・三人組みでいいんだよな？

なんかやけに小さい奴と、アニキと呼ばれている奴、後はデブ。

までよ？黄色い布つてことは丁度黄巾党が活躍する時期か？

それは好都合、立身出世する為のいい機会だ。

俺には武力でしか評価されないだらうし抜群の時期だ。

「おい、デブ。お前はこいつがいつ来たか知ってるか？」

「・・・わがんね」

「だめだ、テブに聞いたのが間違いだったな。そんでそこの兄ちゃん、一体どこから現れやがった？」

「ん？ ここから南東5里のところから来ただけだぞ。全力疾走で30秒ジャストってところだな」

「アーニキ、こいつ頭おかしいんじゃないですか？」

「そりゃ そりゃだらう。が、言葉は通じてんだよな？ なら、イカレちまつた野郎なんだろ？！」

酷い言われようだ。

俺は事実を述べたまでであつて、決してイカレちまつた野郎ではないんだが。

さて、説明書はああ言つたが、こいつらは根っからの山賊に見える。

「なあ、ちょっと聞きたいんだけど……お前らは山賊、いや賊であつてるのか？」

「つ！ 馬鹿が、てめえらが周りを警戒していねえからー！ のトチ狂つた奴に計画聞かれてんだろうが！」

「すいませんアーニキ！ 今までと違つて大きな仕事ですから、つい浮かれて」

「なるほどなるほど、普段も小事の罪を犯してはいるが、これから根っからの賊になろううつて訳か」

「なんだ、てめえそれが悪いかよ！賊にならなきゃ生きていけねーならなるしかねえだろうが！」

「そりだそりだ！ほつとでのイカレ野郎が生意氣いつてんじやねえ！」

「ああ、抗弁ありがとう。確かにその通りだろうが、それはお前らの視点であつて奪われる側の視点ではないな。とはいっても、俺も大して変わらないことを今からするわけだが・・・なー！」

エイヴィイヒカイテ
永劫破壊の活動位階を利用してデブに切りつける。

俺からしたら右手を振つただけなのだが、不可視の斬撃はデブを容易く切り裂き、腹を一刀の内に輪切りに変える。

瑣末な鎧を着てはいたようだが、聖遺物の、戦雷の聖剣を前に物質スルーズワルキューレの堅さなど意味はない。

いや、意味はあるが、物理的な面以外にも靈的な面で防がねば防げぬ行為。

この世界では誰も抗うこととはできない。

のはいいのだが、些か本気でやりすぎたかな？

腕を振るつだけで、不可視の斬撃が当たつていない地面までもが抉れ粉碎している。

んー、衝撃波つてやつか。

本来であれば生き残っているはずのチビヒマーキと呼ばれる奴も木端微塵になつてゐるわけだし・・・

これは大幅な手加減が必要だな。

「お見事です胡車児様！」これで自身の実力を把握できましたね？」

「ああ、嫌と言つほどに把握できたよ。走れば時速240キロで走れるし、腕を振るえば衝撃波がでる。いやはや、やり過ぎもいいところだな」

「えーっと、衝撃波については、恐らく胡車児様が聖遺物を巧く扱えていないからで・・・力に振り回されているせいだと思います。つまり、要練習というわけですね」

「やらないといけないことばかりだな。まったく面倒極まれりといったところだ。で、この後は何をするんだ？」

「チュー・トリアルは山賊の討伐、つまりは以上で終了です。お疲れ様でした。後は自由に行動していくださって結構ですよ？」

「こいつからが本編つてわけか。んーどうしようかねえ、確かに北西に7里言つたところに陳留があるんだつけ？だけど、衣服とか剥げなかつたんだよね・・・木つ端微塵になつちまつたからなあ」

殺してから気が付いたのだが、そういえば金品を奪つたり、衣服を剥ぎ取つたりするんだつた。

デブはまだ辛うじて形が残つてゐる者、後の二人は血溜りでしか

ない。

やれやれ、どうするべきか。

「だったら、陳留にして仕官するのがよろしいでしょう。胡車児様の武力を持つてすれば容易に武官になられることでしょう」

「まあ、そんなところか。金が無くて信用を勝ち取れないなら、実力を見せて实用性で判断してもらうしかない。幸い、陳留には彼の人材マニアである曹操がいるだろうからな。飯にはありつけのか」

「ですが、曹操の性格からして胡車児様が一度部下になった場合、手放すとは考えられません。胡車児様は既に曹操の騎士になる」とを考えていらっしゃるのですか？」

「ああ、それはたぶん問題ないかな。というのも、俺は武官ではなく一兵卒として曹操の下へ行こうとしているから。最初から武官として活躍するのも、そりやあ英雄譚としてはいいだろうナビ、やつぱり兵卒から成り上がっての立身出世だろう？」

「一兵卒ですか・・・それはそれは大層な物語になりますね。どうやって推挙されたり、見出されたりされるかは兎も角、夢のある話でいいと思します」

まあ、それもあるんだが、実際にはもっと微妙な問題もある。

俺のように三国志とかのシミュレーションゲームをやつたことがある奴はわかるのだが、優れた能力値を持つ奴は賃金が高くなる。

だが、現状の曹操は恐らく刺史程度・・・って、あれ?この時期つ

て陳留に曹操がいたつけか？

まあ、説明書も陳留に曹操がいることに疑問を抱いてないわけだし、これは正しいんだろう。

つと、それは兎も角、現状で刺史といふことは扱える資金も乏しく、これから飛躍していく時期に高い人件費が掛かるのは大きなロスとなる。

それで優れた武将を抱えることができるのであれば良いのだろうが、俺が曹操陣営に留まるかどうかはまだ分からぬ話である。

つまり、兵卒の身で曹操が如何なる人物かを見極めた方が都合がよいというわけだ。

後は、兵卒であつた方が自由の身に近いといった点。

人を殺して魂を積極的に集めたいと言つのもある。

武官のある一定の立場になつてしまえば、前線に出て戦うことなど皆無だらうからね。

「胡車児様、お考え中のところ申し訳ありませんが、チュートリアルが終了した為に私にもお別れの時間がきました。きたのですが、一つお聞きしたいことがあります・・・よろしいですか？」

「ん、もうそんな時間なのか。チュートリアルまでの音声ガイドダンスなんて実に律儀だな」

「定期に消えるのも私の役目ですから。えーっと、それで質問なん

ですが、胡車児様はこの世界に来たことを恨んでいないのですか？やけに順応しているようで、その、不思議なんですが

「理不尽だと、そう思つたけどさ。結局のところ、これは俺自身の願いであつたことは確かな事実だし、俺つてリアリストなんだよね。実際に別世界に着ているわけだから、前の世界の都合では動けないわけだし、なうこの世界の都合で動いていくしかないよね」

殺さなければ死ぬと言つのであれば、殺す。

奪わなければ死ぬと言つのであれば、奪う。

普通はそういう問題に対しても何か葛藤があるはずなんだけど、俺の場合は極めて薄い。

先の山賊に対してもはある程度は悩んだが、結局は殺すこととした。

いざ実戦で躊躇しても困るわけだし、後のことを考えれば有効な判断だよね。

ひと、合理的な思考をしてこらへりなんだけど・・・周りの状況に流されていふとも言えなくもないか。

ただ、それを理解して行つてゐるかそうでないかは大きな違いだと、俺は思つたけど。

「割り切つて行動していくことですか。感情は一の次、全てを合理的に進めていく・・・実際に効果的だとは思いますが、それでは・・・」

「人らしくない、つて？ま、余裕が出来たら人の真似事だつてするさ。でもさ、今の俺はこの世界に着たばかりだし、やれることはやらぬといけない。運よく聖遺物使いになれて不老不死となつたわけだけど、そうでなければ人なんて簡単に死ぬんだから。嫌もなにもない」

「なら、早く戦乱が終わり、胡車児様が人として振舞える世界になるといいですね」

「その通りだが、別に戦乱が終わらずとも人の真似事はするぞ？そうだな、人並みの暮らしを送れる様になつてからだな。今はまだ、生きるのに精一杯だ」

「ふふふ、そうなるといいですね。それでは、もうお別れの時間になりましたので、これでお別れです。胡車児様の願いが叶いますこと、お祈り申し上げてこの場を去ります」

なんだか歯痒い事を言われたまま、説明書は塵となつて消えた。

役目を終えたといふことだらうか。

「さて、これからは独り身、一人旅つてやつか。願いが叶うかどうかはわからんが、一先ずは今日の飯を求めて陳留へ向かうとするか」

時刻としてはまだ、昼くらいか？

夕暮れには城門は閉まつてしまつだらうから、早めに辿り着いておきたい。

それに、兵卒として仕官しようにも、夕暮れに向かう奴はないだ

ぬつかりな。

「 わたし、こいつをやつてみまつか」

第五話 異世界での鍊金術

「ヒヒが曹操の治めている陳留か」

チュー・トリアルの後に再び全力疾走をして陳留まで来たわけだが・・・

・
存外人が少ないな。

「ま、東京や大阪、近代の日本と比べるのは間違つてゐる話なんだろうけどね」

大門から入つて直ぐの大通りは活氣があるといえるが、一本裏道に入つてしまえば人は疎ら。

更にもう一本進もうものなら、そこにはほとんど人はいない。

大通りが商業地区で裏道が住宅地区であれば確かにその程度かもしれないが、些か閑静過ぎる気がしないでもない。

「そういえば、この時代の徴兵方法は職業軍人ではなかつたか。季節がいまいち分からんが、暑くも寒くもないということは精々秋とかその辺か？閑農期で民を兵役に課しているとか、そういう理由で閑散としているのか？」

もしそうだとすれば、一つの機会に出遅れたことになる。

黄巾の乱は相手が弱いが数が多いと、経験稼ぎには持つて来いなん

だがあ。

「一先ず、裏道から表通りに戻つて・・・詰め所みたいな場所を探せばいいのか？閑農期なら兵卒の募集をやつしていくもおかしくないはずだが」

と、表通りである大通りに戻つてから気が付いた。

チユートリアルで山賊から衣服を剥ぎ取るのを仕損じた為、服装が極めて浮いていること。

金品がなく衣服の購入ができないこと。

「困った困った。こういうときの対処方法ってなんだつたか・・・ああ、未来から来ているんだから未来のものを売り払えばいいか。恐らく貴重品の類になるはずだ」

とはいっても、今所持しているのは鞄くらいのもの。

後は今来ている冬用のコートだが・・・これを売るしかないか。

安物のコートだが、ポリエステルと綿によつて作られているコートなどこの世界には存在しないはず。

一先ずはこれを売り払つて衣服を整え、更には武具も揃えるなら揃えたいところだ。

ま、精々粗悪品で身を固めるのが精一杯なのだがね。

「そつと決まれば大通りで、衣服を売っている店でも探すか。んー、

そうだな、あの店が良さうだ

大通りの中で一際目立つ店に狙いを定め、そこにコードを売りに行くことにした。

理由は簡単、都市内で最も大きい店と言つ場所は大抵が偉い人々、貴族など富裕層が利用しているはずだ。

そうであれば、この日本から持つてきたコードが極めて貴重な品となり、高価に買い取つてもらえるに違いない。

富裕層の方々に毎度毎度飽きない品を提供するといふことは非常に労力がかかることだらう。

そこには、明らかに異質とも言える物品が売りに出されるのだ、渡りに船とはこのことで、ましてそれが非常に珍しいものであるのなら如何様にも値段は吊り上げられるはず。

「主人はいるかな？ 買い取つてもらいたいものがあるのだが

店内に入り内部を見渡す。

・・・げっ、なんだあれは。

いや、までよ？ なんでこの時代にブライジャーなんもあるんだ。

んー？ んー、でも、原始的なものは古くからあつたらしいからいいのか？

ただ歴史書に残っていないだけかもしれないからなあ・・・都合が

悪くて消されただけかもしれない。

細かいことはいいか、現にここにブロジャーガ売っている、それだけの事実で十分。

「よつこいらっしゃいました。私がこの店の主であります。買取をengo希望のことと、お品の方はそちらの手持ちの品でよろしくですか？」

「ここのコートを頼む。ああ、一部の支払いを現物払いにして欲しい。そうだな・・・身動きのとりやすい軽装であるという条件を満たしていれば他は特に問わない。3着ほど用意してもらいたいな」

「それは構いませんが・・・この衣服は実に肌触りが良いですね。どうにも見たことの無い素材で出来ているようですね」

「珍しいだらう?」の大陸を越え、遙か羅馬からの伝来品だ。一度と手に入らぬ一品といつても過言ではないと私は思うが・・・ま、私は買い取り価格に口を挟むつもりはない、好きにしてくれ

「なんと!それはそれは大層貴重なものを・・・大いに勉強させていただきます」

主人はそういうが、実に打算的に目を光らせてコートを検分している。

客の言うことを容易に信じるわけでもなく、あくまで参考程度にそれが信用できるか踏みしているところか?

当然といえば当然だが、声高々に珍品であると言い、また価格につ

いても主人に任せたといったのだ、安値にはできんだりつ。

現に衣服としては最高峰の素材であることもながら、買取価格も主人に任せたといったのだ、ましてやここは富裕層との取引を主にするだらつ商店であることから、下手な値段をつけてしまえば評判に関わる。

精々足元をみるとしても、一部が物品交換であるからそこを窺くしかあるまい。

「お待たせいたしました。この衣服の価格ですが・・・この価格にて買い取らさせていただきたく思いますが、どうでしょうか？」

多いのか少ないのかよくわからん。

が、先に表通りを歩いていたとき、ある程度の物品の価格は見ていた。

察するに、半月ほどは宿を借りたとしても優に暮らせるか。

元々富裕層向けの場所で、物品交換を希望したのだから多少は金が掛かるとはいって、些か少ない気もするが・・・

「構わんよ。いい値で構わん。私は主人に任せたといったのだ、私よりも詳しい主人が決めた値段なら間違いなどあるはずもない」

一度口にした言葉を撤回することはできません。

ま、半月の間に兵卒になれば良いだらつ。

「ありがとうございます。お言葉で・・・失礼を承知でお聞きしますが、旦那様は旅のお方ではないですか？」

「まさにその通りだが、それがどうかしたかね？」

「いえいえ、滅相もございません。ただ、私どもはある程度この街で顔が利きますゆえに、よろしければ今晚の宿をご紹介させていただこうと思つた限りでございます」

「ふむ、それはありがたい話だ。何分、ここに来て間もなくてな、それほど詳しいわけではないのだ。それに主人が進める場所であれば外れを引くようなこともないだらう」

「それでは手配させていただきます。ああ、もちろん宿の代金は私にお任せください。此度の商品を譲つていただいたせめてものお禮でござります」

「感謝する。ということは、私が希望した衣類についてもそこに届けられると判断して構わんかな？」

「はい、ここで採寸を終えた後、宿の方へお届けさせていただきます」

「わかつた。では主人に任せる」

俺が快諾すると主人は即座に人を呼び寄せた。

大方宿への案内人なのだろうが、実に無愛想である。

「お前は採寸が終わり次第、旦那様をいつもの宿にお連れしろ。く

れぐれも粗相のないようにな

「お待たせしました旦那様、宿へはこの者がお連れしますゆえ、一
先ずは採寸の方をよろしいですかな?」

「ああ、構わんよ。主人も暇ではないだらう、やることとはさうさて
やってしまったほうがいい」

奥へと通されて、速やかに採寸を行つ。

手際のいいことだ、いつも、手間取らないのをみていると氣分がいい。
採寸の最中、主人が俺の衣服に興味を示していたのが若干疎ましく
はあつたが・・・

どうやら、俺の着ている服は下着ですら主人の氣を惹くものらしい。
やれやれ、商人というものはこれだから・・・いや、注意深く見て
いられるからこと商人として成り立つのか。

「旦那様、採寸は終了いたしました。後は宿にてお待ちいただけれ
ばお届けに参りますゆえに・・・」

「ああ、わかつた。彼に案内してもらえばよいのだらう?主人の邪
魔をしても悪いだらう、私は先に失礼させてもらひよ」

用を済ませたらさつとその場を去る。

俺には武具の購入や書籍の購入など、まだまだやらなければならな
いことがあるからな。

それに、いつ堅苦しい言葉使いも面倒ではあることだ、早くここを去りたい。

主人は俺が見えなくなるまで門前で見送つてくれたが、俺としてはそれよりも早く衣服を仕上げてもらいたい。

そう思うのは俺がせつかち過ぎるということだろうか。

と、またしても考え込みながら歩いていたら目的地に到着したらしく。

気が付けば俺は部屋に通されていて、案内役の男も既に姿を消していた。

「嫌な予感がするけど、もしかして話半分に適当に返事とかしてたんじゃないだろうか」

俺の悪い癖なのだが、何かに熱中すると他のことが目に入らなくなまる。

それに加え、考えながら別の作業をするといふことも苦手なんだよね。

今回はそれが両方とも発動して、気が付けば宿屋つてことに。

「そんな俺が兵の統率を行えるわけがな・・・って、もしかして統率を1に設定したからさらに悪化してるんじゃないかな?」

「胡車児様、どうが致しましたか?」

「つーいや、なんでもない。気にしないでくれ。・・・とにかく、この付近で短剣の類の武具売っている店を知らないかな？旅の途中で喪失してしまってね、代わりを探しているんだ」

「短剣ですか。それでしたら、胡車児様が買いに向かうよりも私が買いに向かった方が良品が手に入りますね。市販で売られている短剣は粗悪品が多く、信頼性のある品をお探しならある程度の伝手をお持ちでない方は・・・」

「なら、手間かもしれないが頼んでもいいかな？護身用にも使える短剣、短刀の類を2本、可能なら籠手や鎖帷子の類も欲しいのだが・・・予算はこれくらいで足りるかな？」

「一ト売った代金のうち、その半分を差し出す。

「そうですね・・・籠手や鎖帷子の類は入手可能でしょう。ですが、短剣の類に関しては並程度の品質になってしまふかもせんね」

「では、もう半分出せば十分か？要求されるのは第一に強度、第二に切れ味で頼む」

「これだけあれば購入できるでしょう。では、使いの者を出しておきます」

「ふう、これで大抵の品が揃つたかな？」

この世界での衣服も後に宿に届き、鎖帷子や籠手、武器となる短剣も手配できた。

本来であれば、旅をするのに背嚢などは必要不可欠なんだろ？ナビ、時速240キロで走れる以上は必要あるまい。

明日にでも詰め所にでもいけばいいのかな？

それで無事に兵卒になれば、いいのだが。

「すまないが、暫く休ませてもらひ。食事のときまでは起こそないでおいてくれ。衣服やその類が届いたときは後で渡してもらえれば構わないから」

「承知しました。では、『ゆっくりお休みください』

ま、聖遺物使いが疲れたりとか、そういうことはないのだが

肉体的には疲れていなくても、精神的には大いに疲れる。

なんといつてもまだこの世界に来て1日目なのだ。

流れのようにここまで来たが、実は心臓はバクバクであまり余裕はない。

ここはわざと寝て、落ち着くに限る。

明日は待ちに待つた、騎士への第一歩を踏み出す日なのだ

体調は万全で望みたいだろ？

第六話 採用試験（前書き）

誤字修正を行いました。（12/20）

第六話 採用試験

「寝すぎたなあ、体がダルイ。んー料理も口に合わなかつたせいもあるだろ?ナビ、これはあまりよろしくないな」

昨日は結局、食事の時間までずっと眠つたまま、勿論食事を取つて直ぐにまた眠つた。

夕食は、恐らく豪華であるものなのだろうが、如何せん味が薄かつた。

日本という国で多種多様な味に慣れていた俺にとってあの薄味は厳しい。

まあ、海が近くにあるわけではないから塩がふんだんに使えないのだろう、こればかりは仕方ないといえばその通りなのだが。

「不満と文句は尽きることがないってのが、いつの世にも言えることなんだよね。満ち足るを知らず、つて非常に贅沢なことだとはわかつてこのみのだけど」

今は、陳留にある詰め所に向かっている。

根拠は特に無いが、恐らくここに向かえば兵卒になれるだろうと俺の感が告げているからな。

外装に、見繕つてもらつた軽装の衣服を羽織り、中には鎖帷子を身に付ける。

街中で実際に過剰防衛ともいえる装備なんだろうが、つけておくに越したことは無いだろ。

実際には鎧帷子などなくとも、傷一つ付けられることもないのだが、何も装備せずに傷を受けぬなどと、怪しいことこの上ない。

ま、そういうわけであえず装備している。

今着ているのも、慣れるためだな。

いざといふときに違和感を感じていては戦闘に集中できない、つづくづく自身の欠点だと俺は思つよ。

短剣は腰につけている。

これもまた実際には聖遺物があるので必要はないのだが、不可視の斬撃というものは現実的に考えて有り得ない。

つまりはカモフラージュというわけで短剣を持っている。

2つ持つているのは一刀流に憧れていたから。

騎士といえば大剣なのだろうが、双剣も俺は悪くないと思つ。

暗殺者みたいだと言わればそれまでだけどな。

「つと、ここが詰め所か。流石に早朝だけはある、眠たげだが兵の姿もちらほら見えるわけだが・・・そろそろ早朝訓練の時間か?」

「む、なんだ貴様は。一体何を言ひていい

ぐあ、心の声が漏れていた！

まだだ、これくらいの声ならまだ大丈夫だらう。

ただ単に感想を述べただけに過ぎないわけだから、それくらい
はセーフ、セーフのはずだ。

「私は、姓は胡、名は車児と申す者。御高名な陳留刺史である曹孟
徳様の下で働きたく、志願しに参つた」

「なんだ兄ちゃん、見たところ旅人のよつだが・・・」定住で
もするつもりか？

「見聞を広める為、各地を巡り回つてゐるのだ。曹孟徳殿が噂通り
の御高名な方であればそれもあり、そうでなければここを去るだけ
だ」

「てことは、傭兵の扱いだな。体格は十分、歳も問題ないだらう。
で、お前さんは腕に自身があるのか？」

「腕には自信がある。誰にも引けを取るつもりはない」

「ハハハ、そんな短剣で言われてもな。まあ、いいだらう。えーと
と、胡車児だつたか？お前が傭兵になるのに相違なければ、この紙
を持って向かつて左の扉に入れ。そうすれば、後はトントン拍子で
話しが進むだらうよ」

言われるがままに紙を受け取り左の扉に向かつ。

用紙には、流し読み程度だが雇用契約に関するないようだと理解した。

契約金と出来高払い・・・ふむ、これはこれで中々つまこ仕事ではないのか。

それだけ危険で死に安い仕事に回されるところなどもあるだろ？

が。

「む、まさか早朝からこりこりに来る者がいるとはな」

そこには青髪の女がいた。

受付業務でもしているのだろうか？

その割には、妙に威圧感があるといづか、手練であるよづを感じる。

「どうした、右の扉ではなく左の扉に来たのだ。相当の手練なのだ
わづへ、名はなんというのだ」

なるほど、右と左である程度の篩い分けをしてくるところとか。

左ではなく右であったのなら、恐らく一兵卒。

「つまこ仕事」と飛び級といったところか。

「私は、姓は胡、名は車児と申す者。御高名な陳留刺史である曹孟
徳様の下で働きたく、志願しに参った」

「御高名とな……生憎、華琳様はこの地にて刺史を為されている方だが立場は先に言つた通り、刺史だぞ？それなのに御高名とは、一体どこで知つたのだ」

「私は私が使えるべき主君を探して見聞を広めつつ旅をしている。その旅先で曹孟徳様の噂を聞き、この陳留に来た」

「なるほど、旅の途中でか。では、胡車児にとって陳留はどのように映る。噂どおりの人物が治める街であると思つか？」

「十一分に。治安よく、活気溢れている街ではありませんか。ですが、それだけでは曹孟徳様本人を知ることにはなりません。故、曹孟徳様の下で働き、見極めようと思つた次第」

「そうか。なら、華琳様の素晴らしいしさを存分に味わうがいい。華琳様こそ、天下を制するに値する霸王だと、そう私は思つてゐるからな。とはいへ、胡車児の実力を知らぬうちに、出来ぬ話であるが」

「採用に際して試験を課す、といふことですかな？」

「その通り、幸い今は調練の最中で、姉者もいる。胡車児、腕には自信があるのだな？」

「ああ、誰にも引けを取るつもりはない程には」

「それは重複、ならばその腕を見せてもらおう。私の後をついてきてくれ。・・・そつとねば名を伝えるのを忘れていた。私は、姓は夏侯、名は淵、字は妙才だ」

行き成りのビックネームに目玉が飛び出しそうになつた。

確かに、確かに三国志の武将が女性になつているとは聞いていたが。
・・俺はクマのような大女かと思っていたよ。

つと、夏侯淵に置いていかれぬように付いて行く。

先ほど姉者とかいつていたから、恐らく夏侯惇も同じく女性なのだろう。

そして課せられた相手は夏侯惇であり、彼女と試合をして俺自身の腕を披露せねばならないと。

やれやれ、最初から実に大物を引いたものだ。

だが、ここで夏侯惇の実力が知られれば後は大体知れたようなもの。

ただ、手加減をしなければならないといつのは実に面倒なことでもあるがね。

「姉者、調練のところ悪いが華琳様への仕官者が現れた。武官志望で腕には自信があるらしい。ここは一つ、実力を測つてくれないか」

夏侯淵に付いて行くこと数分、ここは既に兵の練兵場。

今話しかけた女性が恐らく夏侯惇で間違いないだろう。

この頃はまだ眼帯はしていない、ということはやはり今の時期は巾の乱前後なのだろう。

眼帯をしていれば少なくとも反董卓連合の時期を過ぎているだろう

し、眼帯をしていない場合だとしても、兵に忙しさがなく、反董卓連合には至っていないはずだ。

となれば初陣は黄巾党の討伐任務になるのかな？

まあ、それも夏侯惇との試合を終えた後、見事仕官できてからと違う話なのだろうが。

「秋蘭がそういうのなら……だが、仕官するのはその男か？」

「私は、姓は胡、名は車児と申す者。御高名な陳留刺史である曹孟徳様の下で働きたく、志願しに参った。私の実力を披露する相手が夏侯元讓様であるのなら、これ以上の喜びはない」

「ほほう、華琳様だけでなく、私のことも知っているのか。私はそれほど有名になつた覚えはないが……まあいい、胡車児といつたな？先手はくれてやる、」

なんか思つた以上に好戦的よいつか猪突猛進な感じだな。

それに比べて夏侯淵は落ち着いている。

ふむ、史実だと逆のような気がしたが気のせいか？

「先手、ありがたく頂戴します」

答えると同時に夏侯惇へ向かって駆け出す。

速度は手加減に手加減を加えて一般人より少しは早い程度。

達人からすれば造作もなく避けられる速度であり、当然カウンターを貰うことは確実、さて、どう返す。

「なんだ、腕に自信があるといった割りにこの程度か？確かに君と比べれば早いかもしけんが、それでは兵卒以下の速度だ」

接近して右手に構えた短剣で切りつけたが悠々と防がれる。

よくもまあ、あんな大剣を振り回せるものだ。

今回の試合だが、もちろん聖遺物は使っていない。

あくまで腕を披露するだけであり、彼女を殺すわけではないのだから当然のことだ。

・・・それもあるけど、兵に囲まれた中でやるのは少々拙い。

合戦時には奥の手となつて不可視の斬撃は、なるべく知られたくない技だからな。

聖遺物使いとして全力全開で戦に赴くのもそれはそれで良いのだが、出切れば使いたくはない。

緊急時は別として、それ以外に用いようものなら容易にこの世界の戦の定義を壊してしまつ。

俺だけで勝敗が決まるなどと、そんな戦争に何の意味があるんだろうか。

「どうした、考え方か？ま、自信満々に切りつけた結果、悠々と防

がれたのだから分からぬくもないが……それでは戦場では死ぬだけだぞ」

「！」冗談を。これはあくまで試し撃ち、手加減に手加減を重ねた結果です。そうですね……本気とこいつのはまじつて一撃を言つのですよ！」

右手で夏侯惇の大剣を受けつつ、左手の短剣で切りつける。

先ほどの一撃とは違い、多少はマシな攻撃……恐らく一般的な手練の手腕くらいだと思つ。

いや、手練の一撃を見たことがないから推測なんだけどさ。

「ほう、今のはなかなかやるではないか

だが、それもまた容易に避けられる。

「余裕そつな発言だけど、顔に余裕がなくなつてるよ。次も防げるのかな？」

「ぬかせ！私が貴様などに遅れをとるはずがない！」

「なら、今度は俺が受けよう。さ、夏侯元讓様、思つ存分にかかるてこられるがいい！」

「言われなくとも……」

先の攻撃で、手加減の田安は立つた。

夏侯惇を焦らせるまでは行かずとも、余裕をなくす程度も力を出せば十分だ。

と、攻撃に関しては把握したから、今度は相手の攻撃を受け流す練習をしようかと思ったのだが……

意外に、といつか予想通りに猪武者だな。

猪突猛進の猛者とは。ふむ、相手にしたくない部類ではないかな？

「はあああ！」

「そんな大振りで俺が捕らえられるとでも？」

夏侯惇が振るう大剣が俺を捕らえようと縦横無尽に襲い掛かる。

避けられるものは避け、一般的に避けるのが間に合わないと思われる攻撃は弾く。

うーん、強い。いや、強いんだろうけど。

時速240キロでの高速戦闘が可能な俺からすると児戯に等しい。

欠伸が出ちゃうかもしれないな。

「ぐううう・・・胡車児！避けるんじゃない！」

「冗談でしょ〜。わざわざ俺が止まらずとも、夏侯元讓様なら容易に当たられると思っているのですが・・・」

「言つてくれるなーーー、貴様のよくな奴が在野に埋もれているなどとーーー」

「おーなんか評価が高いらしい。

ま、夏侯惇も自身の武に誇りをもつてゐるだろーじ、わからなくもないけどね。

・・・それはいいんだけど、さつきから俺、元の口癖に戻つて俺とかいつてないか？

これ大丈夫かな？不敬罪で云々とか、そんなことにはならないよね？

上下関係つて大変だ。

「夏侯元譲様、息が上がつておいでですが・・・そろそろ準備運動は終わりではないですか？そろそろ夏侯元譲様の実力を拝見させていただきたいのですが」

「はつーよくわかつているなーーー、そろそろ私の実力を見せてやるつと
「だめだ、姉者」

更に煽つてみたが、即座に夏侯淵からの横槍が入る。

んー、思惑としては一般兵の前だからやめておこいつといつといふかな？

夏侯惇は曹操陣営の武の象徴ともいえるし、彼女が突然現れた武将に打ち負かされるのは好ましくないだろー。

「姉者には兵の調練があるだろ？ それに胡車児の実力は十分計れた」

「秋蘭！ だがまだ勝負はついていない！」

「ああ、だから勝負は調練が終わつた後にでもすればいいだろ？ 今は、華琳様が下さつた調練の任務を遂行するべきだ」

「ぐつ・ぐつ・確かに。華琳様の任務をやらぬわけにはいかない。胡車児！ 調練が終わつたら決着をつけるぞ！」

「胡車児もそれでいいか？」

「私の実力を！」理解していただけたのであれば、私としては異論などあるはずもございません」

「では再び私についてきてもらおうか。胡車児殿は現状では客将という扱いにならうが……これも華琳様の承諾を得てからだ。これから華琳様に謁見することになるが、構わんだろう？」

トントン拍子で話しが進んでいくなあ、本当。

元々は兵卒からのスタートをするはずだったのに客将スタートとは。

ま、これも正式に任官するのであれば武官になるだけで、今は見極めるみたいなことを夏侯淵に言つたからこそ客将扱いだろ？

一気に高給取りか……お金の使い方を覚えないと。

どうにも武具や衣類の話は出来たものの、金銭感覚がないというか。

これ硬貨にどれだけの価値があるのかがそつぱりわからない。

政治が1つてのは「うこつ」といひて反映されるつてことか。

これから先が実に不安になることである。

「で、どうなのだ。なにやら考えているようだが」

「ああ、すまない。考え込むと周りが見えなくなるのは俺・・・私の癖でね。曹孟徳様に会うといつ話だが、是非会わせていただきたい

い

「ふ、その”俺”というのが本来の口癖か？私達の前では構わないが、くれぐれも華琳様の前では慎むよう

「う

これから曹操への謁見か。

行き成りラスボスクラスとの邂逅とか、運がいいのか悪いのか。

だが、曹操に会えると言うのであれば会うべきだろ？

三国志において極めて明確な霸を打ち出しあとした、曹孟徳。

果たして、どんな人物なんだろうか。

夏侯淵と夏侯惇が綺麗どころだったわけだし、曹操も同じくそういうのだろうか。

いや、までよ、曹操は美人を囲うのが好きだったはずだからもしか

したら男の可能性も・・・

まあ、会ってみれば分かることか。

男であれ女であれ、仕えるべき人物であれば主となつていただくな
けのことだからな。

そんなことは瑣末な問題、そう瑣末な問題なのだ。

第七話 最終、役員面接（前書き）

修正しました（12／21）

第七話 最終、役員面接

「華琳様、武官として華琳様にお仕えしたいという者を連れてまいりました」

「わづ。入りなさい」

ついに曹操への謁見か。

よくよく考えれば一連の行動は日本でいうところの就職活動と同じなんだろうけど・・・よくもまあ、スマーズに行つたものだ。

日本でもこれくらいスマーズに就職活動が出来ていれば、この世界に来ることもなかつたんだろう。

重々しい扉を押しあけて、ある種、王者が為にでも作られた玉座を見やる。

玉座の間には親衛隊とも取れる武装集団が整列しており・・・なんだこれは圧迫面接か?

いや、まあ、護衛役だといつのもわかつていいのだが、それにしても数が多いだろつ。

形式と言えばそれまでだが、そうでなければ恐怖を『えかねない。

つまりは、それだけ俺が信用されていないということの裏付けとなるのだが。

「「」の者が華琳様にお仕えしたいというものです。武官としては姉者・・・春蘭に引けを取らないほどの実力を持つております。文官としての適性は未だ測っておりませんが、口が良く回ります、それなりの活躍はするかと思われます」

「「」紹介に限りました、私は、姓は胡、名は車児と申す者であります。御高名な陳留刺史である曹孟徳様の下で働きたく、志願しに参りました。どうかよろしければ、私めを末席へと加えさせていただきますことを何卒よろしくお願ひ申し上げたく存じます」

「既に知っているとは思つけれど、私は、姓は曹、名は操、字は孟徳。胡車児、貴方のことだけど、春蘭にも引けを取らないほどの武官と秋蘭は称したけど、それ以外に貴方が得意とする事はないのかしら?」

これは俗に言う、何か特技はありますか?とか何か資格はありますか?

といった類の質問ではないだろうか?

んー、返答しにくい質問だな。

俺は実際問題、武力以外では出世できなもそつである。

他に得意なことと言われても、統率はパーだろ?

知力はほぼ頂点に立つと思われるが、それを伝える政治がパー。

語彙が貧弱だから、外交官として立ち回ることもできないだろう。

当然物覚えも良くないのだから、内政官も不可能。

日常会話くらいの、日本でも身に着けた程度の会話であるなり、多少は融通が利くけれど他は多分無理だろう。

となれば、俺に残されているのは武力と、そして聖遺物使いとしての力だけだ。

運用方法としては、斥候かな？

魅力を100にしてしまった結果、妙に人の目を集めることとなってしまった気がするが、持ち前の俊足を生かして斥候を行つのがベストだろ？

「誠に申し訳ないのですが、私は武力以外に優れたところを持ちません。兵の統率を取ろうにも、意思の疎通に手間取ると思われ、また文官を担おうとしたところで、これもまた疎通を取ることは難しいでしょう」

「そう。それでも構わないわ。武に関して一芸に秀でるだけでも現状は十分でしょう。貴方に向上心があれば、意思疎通等という問題は瞬く間に氷解する。違つかしら？」

「誠にその通りでござります。曹孟徳様のご厚情、感謝にたえません」

「これで意思疎通が取れないというのは謙遜し過ぎだと私は思うのだけどね。まあいいわ、胡車児、貴方を今日から密将扱いとするわ。それでいいのでしょうか？ 貴方は随分と遙っていたけれど、実際私を見極めているのではないかしら？」

「恐れ多いことですが、その通りでござります。私自身如国を回り私が真に仕えるべき主君を探している最中にござります」

「なら、貴方のその行脚はここで終わるわ。貴方はこの曹孟徳に仕えることになる」

なるほど、確かにそうなりそうな気がしてくる。

なんというか、こう惹かれるとでもいえばいいのか？

これがカリスマだとかいわれる素質とでもいえばいいのか。

悪い気はしないな。

「陳留での治世を拝見させていただき、曹孟徳様は誠、天下の英傑になられる方だと存じておりますが、それだけでは未だ足りぬと、私は感じております」

「容易に首を縊に振らないのね。ふふふ、気に入ったわ。胡車児、貴方は武官として明日の討伐軍に参加しなさい。兵の指揮に自信がないれば、私の指揮から学べることがあるはずよ。それに、秋蘭が認める貴方の腕をこの目でも見てみたいわ」

「承知いたしました。この胡車児、粉骨碎身の覚悟で務めさせていただきますよう」

ということはかなり忙しい時期に邪魔をしてしまつたということか。

調練場にて将官が直々に調練を付けているのもそのせい、明日の討

伐軍の最終調整といったところだつたのか。

恐らく対戦相手は黄巾党、黄巾の乱が始まる前なのか後なのかはわからんが、前者であるなら規模は小さく、後者であれば規模は大きくなるだろ。

それを陳留刺史でしかない曹操が行つところのは・・・武勲を立てる為か。

「さて、では胡車児の件はこれでいいわね。皆、下がつていいわ」

やはり、親衛隊を配置したのは俺へ対処だつたようだ。

これがまた、他国の武官であつたとか著名な人物であれば話は別なのだろうが、俺は今回アポイント無しで突然現れた無骨者だからな致し方ないことではある。

「胡車児、後は好きにしてもらつて構わないわ。部屋で休息を取りたいのであれば、貴方の部屋へと案内をさせる。明日の討伐軍への参加で色々準備もあるだろから、また詳しいことは後で話しますよう」

額面通り言葉を受け取れば実に俺の為を思つてゐるのだが、どうにも用は済んだので下がりなさいという意味合いの言葉ではないかと勘織つてしまつ。

強ち間違いでもないのだろうが、これも俺の悪い癖だなあ。
もっと云ひ、なんというか、夏侯惇のよつになれたら楽なんだろうが。

「それでは失礼させていただきます。本日は、曹孟徳様に謁見できしたこと、誠に感謝にたえません。この礼は、必ずや明日の討伐戦にて報いらせせていただきます」

「期待しているわ。討伐に関する委細は後で夏侯淵に聞きなさい。二人とも、下がつていいわ」

夏侯淵と共に玉座の間から去る。

曹操は夏侯淵から討伐戦のことと聞けといつていったな。

「夏侯妙才様、明日の討伐戦のことだが・・・」

「夏侯淵で良い。姉者に対しても同様に夏侯惇と呼べばいいだろ？。これから共に肩を並べて戦うのだ、それでは些か他人行儀過ぎるというものだ」

「どうか。なら、夏侯淵。再び聞くが、明日の討伐戦とはどこで誰と戦うのだ？」

「隣街で賊が蔓延っている。黄巾を纏っているので、便宜上、黄巾党と私達は呼んでいるが、その討伐だな。華琳様は陳留刺史という立場でいらっしゃるのだが、元々この地を治めていた州牧殿が黄巾党に怯えて逃げ出してしまってな」

「なるほど、隣街といえども何れ曹孟徳様が統治する地域に違いない。後の為にもここで賊を討伐しておいた方が色々好都合ではあるな。何より、名が売れるというのは得難いものだ」

となれば、ここでの討伐戦においての勝利は当然

また、なるべく寡兵で且つ被害の少ない勝利を齎せば曹操軍の威光
は高まるな。

俺に出来ることと言えば、最前線に立ち丘の指揮を無理やりあげる
こと。

それと、被害を俺が引き受けることか。

「打算的なものだけではないがな。華琳様は民草に対して慈悲深い
かただ、己の治めぬ領地だとはいえ、賊が蔓延っているのが我慢な
らないのだろう」

「なるほどな。夏侯淵が信奉しているのもわかる気がするよ。悪い
が、俺は明日の支度をしようと思つ。夏侯淵も忙しいだろうから・
・俺が使うことになる部屋だけ案内してもらえるか?」

「ああ、お安い御用だ。胡車児が使う部屋は・・・」

さて、明日は自身の望んだ武勲を立てるべき機会、賊の討伐戦だ。

鳥合の衆を蹴散らすに相違ないことだろうが、油断は禁物

少なくとも、俺は不老不死の恩恵を得ているゆえに、ドジを踏んで
も問題はないが他の者は違う。

行軍が巧くいくように、事前偵察でもこなしておぐか。

隣街といつてもそれほど遠いわけではあるまい。

ま、山を越え、谷を越えとなつても、造作もなことだらうナビ。
「ついで活躍でもして、真名を授かるモビリは信頼を勝ち取りた
いものだ。

ところへ、こちいち敬つた言い方をするのが面倒なんだよな。

何よつ、じつ堅苦しこのは苦手だ。

騎士を田指してくるのには不思議に困つかもしれないが、そ
れはそれ、これはこれ。

別に主君と従者の関係などこへりもあるだらうへ。

その中に非常に近しい関係があつても構いはしない。

そうだらうへ。

第八話 先行偵察

「つと、こじが夏侯淵が言つていた隣街……でいいんだよな？」

おかしいな、賊が蔓延つてゐるといつてははずなのに……

「んー、向かう先を間違えたか？これつてどう見ても廃墟だよな」

夏侯淵から明日救助に向かう隣街の場所を聞いて疾走してきたはいもの、そこは既に廃墟となつっていた。

街と呼ばれていたであらうものは既に大半が焼け落ち、とても人が住めるような環境とは言えない。

陳留から距離にして大よそ100里ほど・・・キロに換算すれば40キロくらいか。

直線距離であればこれよりも短いのだろうが、あいにく山を越えていることから距離が伸びている。

これを討伐軍として移動するどれくらいかかるだろうか？

軍の編成にもよるだらうが、どの道輜重隊の行軍速度は遅く、戦備行軍のように周囲を警戒しつつ移動すれば更に速度は落ちるだらう。それに加え、整備されていはざもない山道を通るわけであるから、非常に時間がかかる。

もつとも、輜重隊では山を越えられぬ可能性は十分にあることから

山がある程度迂回した街道ルートで討伐に赴くはずだらうが・・・
一日一日では到底辿り着けないだらう。

となれば、騎兵を戦備行軍で先行させつつ、主力を含む輪重隊列はその情報を元に行軍速度を決める。

こんなところだらうか？

俺には軍の運用術などわかるはずもなく、あくまで推測でしかないが、兵の疲労、炊事を考えたらもつと遅くなるのかもしねない。

近代的な装備を整えていれば、水等の物資も潤沢に、且つ、大規模に輸送できることから行軍速度は早まるとは思うのだが・・・

ま、それを俺が考へても仕方のないことか。

恐らく、今回の討伐軍は総大将に曹操本人が赴き賊を討伐するはずだ。

それが最も名声を高めやすく、合理的であるからに違いないからな。

「軍に関しては、専門家である彼女らに任せればいいとして・・・討伐する相手がないというのは、困った話だな」

街一つを焼き払えるほどの人員がいるのだから、どこかに根城を構えていいるはず。

無ければこの街を焼き払わずとも、占拠して好き放題に鳩巣を構つた方が賊としては良いわけで・・・

それをせずに略奪をして根城に引き返す、更に生存者を残さぬように皆殺しにしたのであれば、賊軍だとはいえども間違いなく指揮官がいるはずだ。

「寡兵にて敵を打ち破る、相手は所詮賊である。んー、過信が下で足を掬われそうな気がするな」

見事罠に嵌るだけの御膳立てが揃い過ぎだな。

これは、そう、なんというか、調子に乗つて突撃した誰かが奇襲を受けて窮地に陥るような。

そんな気がする。

曹操軍がそんな罠に嵌るとは思ないが、勝つて兜の緒を締めよつていつ言葉もあるべりいだ、慎重に慎重を重ねても問題はないな。

「この場にいるのが俺ではなくて、魏を代表するような軍師・・・荀?とか郭嘉が居ればうまく表現できるのだろうが、これを俺が説明するのは無理だな。何せ、政治が1なわけだから」

ま、無いものをねだつても仕方があるまい。

「一先ず、賊軍を探すか。出来れば賊軍の動きも把握しておきたい。仮初の主であるとはいえ、失うなんてことは騎士にあるまじきこと。そして軍として動くのは俺も初めてであるから、出来るだけ準備をしておきたい」

今の俺にできることと言えば、駆けまわって情報を得ることくらいだろう。

勿論、単騎駆けを行い敵将を討ち取ることとは極めて容易であるが、それでは組織として体裁が保てん。

兵は一騎当千の英雄に縋り、自ら戦場に立つ意味を見失うであろうし、主君は見返りを求めずに莫大な戦果を積み上げる将官に疑心を感じるようになる。

曹操が器の小さい者だとは思わないが、彼女がそつではなくとも周りは違う。

徒に力を用いることは我が身を滅ぼすことになるから、やはりここは慎ましくいくべきだな。

当然、平時においては慎ましく、火急時には全力全開も止むを得ない」とだがね。

「さて、この廃墟を中心に縦横無尽に駆け回るとするか。 . . たぶん誰にも見られないだろう、たぶんな」

時速240キロを超える速度で走る人間の顔なんて覚えられるはずもないから好き勝手走つても問題ないだろう。

といふが、そんな人間は普通いないわけだから誰かに話をしたとしても戯言と思われる程度、誰も信じるはずがない。

とこりわけで、後先考えず縦横無尽に疾走、探索を開始する。

まずは周囲の地形に着目して、河川から調べていった。

大規模な軍団を組織する場合、兵糧も必要ではあるが何より水資源は得難いもの・・・容易に井戸を掘れるわけでもなく、掘り進んでも水が湧き出ないこともあるから、都市と河川は切り離して考えることはできない。

「川沿いを進めば何かしら手掛けりが手に入るかと思ったが、何もないか。とすると、賊はどうやって水を貯っているのだ？」

余程多くの井戸を有しているか・・・なるほど、山間部での湧き水か。

河川とはそもそも、小さな河川が統合して一つの流れになっているのだ。

つまりは、主流を抑えなくとも、それに連なる水域さえ押さえていれば水を貯うことは可能だ。

「これは実に面倒だ。幾重にも枝分かれした河川を探すこともさながら、そこに井戸や湧き水も加われば膨大な数になる。探せと言われば探すのも吝かではないが、時間が掛かりすぎるだろ？」

夏侯淵には討伐の準備があるとしか伝えていない。

当然、現地に赴いていることなど知るはずもなく、長時間見かけねとなれば何かと問われるのは明らかである。

「可及的速やかに、そして正確に情報を掴む必要があるか」

だが、闇雲に探したところで何ら進展がないのは今経験したばかりだ。

となれば・・・

「原点に戻る、か。廃墟を隈なく探索して生存者を探そう。後は足跡と、蹄の跡から戦力を探るか」

賊が騎兵を運用しているか否かは実に有用な情報となる。

奇襲を受けた際、賊が騎兵を用いていれば逃げ切るのは至難の業になるだろう。

が、もし騎兵でなかつた場合は、敵正面の兵を犠牲に本体を撤退させることも可能だろう。

再び廃墟に向かい、隅々まで探索を行つ。

残念ながら、廃墟には焼死体や腐乱死体、また何やら野生動物に食われでもしたのか白骨死体しかなかつた。

幸いなことに、蹄はなかつたことから賊は騎兵を運用してはいないらしい。

運用していくとしても精々指揮官程度であり、脅威を感じるほどのものではないだろう。

「うーん、どうも妙だな。本当にこの街に賊が蔓延つていたのか？確かにそれは間違いないだろうが、一日一田で死体が腐るとは到底思えない」

だが、曹操や夏侯淵は確かに言つていたのだ。

隣街に賊が蔓延っているのだと。

「となると、最も疑わしいのは、これを誰が報告したのかということとか」

要は誘い込まれているのではないかと言ひひじ。

実力があり、野心もある曹操を罷にかけようとするものがいるのではないかといふことなのだが・・・

「誰による陰謀か想定できぬ上に、証拠もない。机上の空論も甚だしいな」

仮に曹操に恨みを持つてゐる者がいるとして、謀殺しようとしているのであれば疑つべきは以下の点である。

まず、街に賊が出たことを陳留に届ける者。

これは別に誰でも構わない。

街から来ただとか、賊に遭遇して命からがら逃げてきただとか、それだけで十分だろう。

事実であるかどうかは問題ないな。

ただこれだけではインパクトが薄く、信憑性が乏しい。

故に、当然ながら斥候を出して賊の規模を把握するわけだから、曹操軍の斥候兵も疑わしい。

ここにはスパイがいるか、もしくは実際に賊に会っているかの2つの場合がある。

スパイであれば、確かに賊がいたとの虚偽の報告をすれば良い。

問題なのは、実際に賊に会つた方が。

賊に扮した奴らに斥候が襲われ、わざと情報を『えらばれて戻つてきた場合だ。

スパイであれば、自らの情報をきめ細かく報告することはしないだろうが、現に襲われた斥候の場合はきめ細かく報告するだろう。

それが掴まされた情報であれ、彼自身は命からがら逃げてきたのは違いないのだから。

最後は・・・

「黄巾党に怯え、姿を晦ました州牧」

本来であれば、曹操が治める地ではないのだが、彼女の力量を知つた上で誘い込んだのであればまさに州牧は策士だろう。

州牧がいれば、州牧が担つべき仕事であったのだ。

それが巡り巡つて策謀となるのであれば、これほど見事な誘引はない。

曹操自身、実力と不釣合いな刺史という立場であり、その状況の中、

州牧が失踪、隣町で賊が発生する。

なるほど、これほどお膳立てされた状況はない。

「とりあえず、陳留に戻つて夏侯淵と相談か。ま、それが一番か？俺が報告するよりも夏侯淵を介して報告した方が信憑性は出るわけだからな」

やつと決めたらさつと陳留に戻る。

あれこれ考えていたせいか、昼過ぎに陳留を出たのだが既に口が落ちようとしている。

このままでは陳留の城門が閉まつてしま……いや、閉まっているかも知れないな。

「夜陰に乘じて城壁を越える。んー、まるで俺が賊みたいだな。だが、致し方あるまい。既に城門は閉じているだらうし、問題はなんと言ひ詰するかだ」

「城壁に上り鍛錬していたとも言えば十分通じるだらうか？…日が落ち始める前に戻つてさえいればこんなことで悩む必要はなかつたものを」

喚いても変わらぬものは変わらんか。

ならば、やつと戻つてこの廃墟のこと話をすに限る。

このまま行軍を行えば州牧による奇襲攻撃を受けかねない、寡兵では危険であるとの進言を・・・

これを巧く伝えられればいいのだけどね。

知力馬鹿にはどうにも荷が重い。

「ま、なるよしこしかならんか。これが俺の見当違いであれば嬉しいんだけどねえ」

第九話 初陣 前編

「どうも、リポーターの胡車児です。現在私は、隣街に蔓延る賊徒を討伐に向かっている最中です」

「？胡車児、お前は何を言つているんだ？」

「夏侯惇・・・今はそつとしておいてくれ。今の俺はちょっとばかり鬱なんだ」

「戦を前に氣分が憂鬱だと？！貴様それでも将官か！」

相変わらず夏侯惇は空気の読めない奴だ。

知り合つてまだ一日目だが、恐らく奴には表裏なくこういう奴なのだろう。

分かりやすくて嫌いではないが、今はちょっと静かにして欲しい。

ま、これも自己嫌悪によるもので、夏侯惇へはただのハツ当たりなのだ。

昨日のこと、山を越え廃墟である隣街から帰ってきた俺は夜陰に乘じて城門を駆け上がり、誰にも発見されることなく忍び込んだ。

城壁の上には勿論、警備を担っていた一般兵がいたが、現実的に城壁を駆け上ることなど一般的には出来ない話で、警戒などはされてゐるはずもなかつたわけだ。

誰にも見つからず誰にも咎められない、上々の首尾に満足しつつ与えられた部屋に帰還、したのはいいのだが、ここにで傍へ夏侯淵に見つかる。

「胡車児、探したぞ？ 一体どこにいたといつのだ？」

「む、俺を探していたのか。それは悪かった。陳留には昨日来たばかりでな？ 街中を散策しつつ、鍛錬をしていたのだが・・・」

「呆れた奴だ。明日の準備をするといつておきながら、街を散策しているとは」

「それは大目に見てもらいたいな。夏侯惇との打ち合いで短剣が欠けてしまつてね。鍛冶屋を探していたのだ。ま、見つけられなかつたがね」

といつのは勿論嘘・・・ではない、実際に欠けてはいる。

打ち合つている最中は気が付かなかつたのだが、所詮は市販品、頑丈とはいっても程度が知れているということだな。

「鍛冶屋か・・・胡車児、それは市販品か？ もし胡車児が華琳様に仕えると言つのであれば腕の良い鍛冶屋に特注でもすればよいのだが・・・そんな金はないだろ？」

「ああ、ないな。だからこそ仕官したともいえる。ま、金はついでに過ぎないが、あつて困るものではなく、何をするにも金がかかるからな」

「その通りだ。まあ、正式に仕官する気になつたら言つてくれ。腕利の鍛冶屋を紹介する。それとだ、胡車児は密将といえども華琳様の配下、鍛錬は練兵場で行つてくれ」

「はいはい、その通りです。で、この時間に俺の部屋にいるつていふことは、何か用事があつたんだろう。俺も夏侯淵に話しがあつたけど……」

隣街……あの廃墟で俺が推測したことについて話しておかなくては。

信憑性が乏しく、予定通り討伐が決行されたとしても、前情報無しとそうでないかでは心構えが変わつてくるだろう。

「すまないが、私も忙しい身でね。姉者が書類仕事を嫌がるものだから、私に回つてくる分が多いのだよ。だから、私から先に話をさせてもらつて構わないか？」

「構わない。夏侯淵が先に話をしてくれ。恐らくその話とやらは、明日のことだらう?」

「胡車児は察しが良いな。まさに明日の討伐に関する事だ。華琳様率いる討伐軍1000は日の出と共に行軍を開始する。向かうは、胡車児も知つている通り、南東にある隣街だ」

ん?んん?

ちょっと、待てよ?

今、夏侯淵はなんと言つた。

南東の隣街だと？

俺が今日向かつた、北西の隣街ではなく、南東の隣街だと？！

「お、おい夏侯淵、今なんといった？俺には南東と聞こえたが・・・」

「

「ああ、南東の隣街で間違いない。ここ最近、南東の隣街に賊が蔓延るようになつてな。最初はただの荒くれ者だったのだが、次第に数が増え、治安を脅かすようになったのだ」

ぐわあああ！

なんといつことだ、てつきり北西の隣街だと思つて北西の隣街を行偵察していたのに！

実際は南東の隣街で・・・俺は、俺は一体何をしていたんだ。

謀殺が、罠が、奇襲が・・・ぐふう。

ここで政治がーといづ弊害が出てきたといづわけか！

北西と南東の聞き違いなど、普通はしないだろー！

「おい、胡車児。寝るのはまだ早い、せめて話を聞いてからだ。で、その賊が街の付近に拠点を構えて・・・ああ、老朽化して既に使われていない砦を根城に大よそ4000ほどに膨れ上がっているようだ」

「・・・なるほど、4000か。それは実に多いことだな。で、どうするんだ？寡兵で勝てば名は得ることが出来る。だが、死んでは元も子もないぞ？」

恥ずかしくて死にたくなるが、今は夏侯淵の話を聞かなくては。

俺の偵察が無意味になつた以上、夏侯淵から聞けるだけ情報を得るしかない。

「その通りだが、所詮賊は鳥合の衆であり、正規の訓練を受けた軍の敵ではない。これは慢心ではなく、ただの事実だ。賊は4000と兵だけはいるが、小突けば指揮が崩壊するほどに軟弱だからな」

「それはなんだ、経験則か？前のそうであつたから、今回もそうであらうというわけじゃないだろ？呼び名は賊であれ、中身は違うんだ。違う結果も十分にあり得るぞ」

確かに、夏侯淵が言つとおり正規軍と賊軍では兵の調練の度合いが違つ為、戦えば正規軍が勝つだろ？

だが、それも1対1では勝つだろ？が、1000対4000ではまた別の話だ。

陳留から南東つてことは、俺がこの世界に来た場所だろ？

つてことは、ただただ荒野が広がるばかりで、4倍差という兵力差に正規軍が飲み込まれんとも限らん。

包囲をされずとも、自軍の4倍の兵が敵にいるというのは圧倒されるに違いない。

「まさか、事前調査による推測だ。とはいっても、経験則も確かに含まれている。南東の賊軍は急速に成長した結果、満足に装備が行き渡らず、鎧は布か皮、武器は剣でも持つていればマシな方で素手が多數だ」

「なるほど、確かにその賊軍に正規軍が当たれば容易に打ち破ることができるだろう。武器を持たぬ相手など、相手にはならん。でも、目標はどれほどだ？ 賊の全滅を目標とするのか？」

「当然、賊軍は一人残らず首を刎ねる。というのも、胡車児、お前は知っているか知らないが、一月ほど前、陳留の北西の街が賊に襲撃されるということがあった。その報を華琳様が受けたときには既に街は廃墟と化し、残っていた賊軍を討ち捨てるこじしか出来なかつた」

「ははあ、つまり今回の賊軍はその残りも含まれているということわけか。ある意味弔い合戦でもあり、勝たねばならないし、逃がしてはならないというわけね」

「ああ、そうだ。相手より寡兵で攻め込めば、奴らも勝機を見出して果敢に攻めてくるだろう。自らが誘い込まれたなどと露知らずにな」

「それなら更に勝機は上がるな。

恐らく、曹操の討伐軍には廃墟になつた街からの志願兵が多くいるはずであり、極めて高い士気を期待できる。

寡兵相手と侮れば、その手痛い一撃を貰つたときの賊軍は・・・指

揮官がいなければ潰走は免れまい。

「用意周到なことだ、それだけの条件を整えれば負けるまつが難しい」

「華琳様に出来ぬことなど何もない。でだ、胡車児には討伐隊の1部隊を率いてもらいたい。華琳様には本隊を、姉者には騎兵隊を、私は弓隊を、後は歩兵隊がいるのだが人が足りぬのだ」

「俺に歩兵隊を率いれというわけか？正氣か！？俺には兵を指揮することなど出来んぞ！」

正氣の沙汰ではない！

統率1の俺に兵を率いれとは・・・最初から混乱壊乱恐慌状態で兵士を戦わせるようなものだぞ！

たぶん。

「そうだ。どの道華琳様の下で武官として活躍するのであれば、兵の千や万ぐらい率いてもらわねば困るのだ。幸い、今回は数百と小勢であるから、胡車児が不得手とはいっても問題ないだろ？」「ひう

「俺が、俺が敗北の一因を担うことになるのか。べべべ・・・ひうなつてもじらんぞ！」「ひう

「そこを巧くやるのが胡車児の腕の見せ所だろ？期待しているのだ、良い戦果を頼むぞ」

夏侯淵め、言いたいことだけ言つて出て行きやがった。

良いだろ？お前達が俺に兵を率いるところのなら率いてやる。

お前達は俺に信を託したのだ。

ならば、俺はその信に報い、勝利をもぎ取つてやる！

つてのが昨日の出来事なのだが・・・

「つて、奮い立つたのはいいけど、やっぱり無理な気がする。もう既に、俺の隊、胡車児隊は崩壊寸前だからな」

「また、胡車児は何を言つているのだ。戯言を呴いでいる暇があれば貴様の隊をなんとかしろ！」

「夏侯惇の言つことも最もだ・・・が、だめだ、俺には兵を率いる才能が本当に欠片もない」

俺の後ろを行軍する胡車児隊は、皆、目が虚ろで生氣を感じさせない。

こいつらも陳留を出る前は元気だったんだけど、次第に意氣消沈して仕舞いには亡者の行軍のよくなつてしまつた。

もづなんか、統率1つて酷い。

今回の討伐戦で最大の敵は間違いなく俺だな、俺。

俺が一番の強敵となるだろ？

「夏侯惇様、前方に砂塵を確認！賊軍かと思われます！」

あれこれ、考へていろいろに賊軍と遭遇。

ところよりは見るからに寡兵であることに釣られて突撃を仕掛けてきた感じか。

「う」苦笑。では、我が軍も所定の配置につくとしよう。胡車児、貴様、賊軍を少しでも後ろに逸らして華琳様や秋蘭の手を煩わせて見ろ！後でこの私が・・・」「

「はいはい、わかつたわかつた。けやんとやるぞ、つまくやる。敵を逸らさずにつちゃんと前線を支えきるぞ、期待していくれ」

「ふん、言つたからには実行してもいいぞ！」

夏侯惇が率いる騎兵は側面待機の遊撃部隊。

基本は俺が率いる歩兵部隊が前線を支え、後方から夏侯淵の『』隊による斬射で敵兵を討ち取る。

曹操は後方予備だが・・・この分だと早々に前線に来ることになるか。

こんな目が虚うなー者共では前線を支えることなどままならない。

まったく、誰のせいだらうか。

「胡車児隊、構え！我が隊は敵軍を正面から受け止める、後方には我が隊を援護する夏侯淵隊と、本隊である曹操様がいらっしゃる！」

くれぐれも、抜かることのないよう！」

「・・・・・うあああああ！敵だ！敵だ！敵が来るぞー！もうダメだあああああ！」

一瞬で恐慌状態になってしまった。

お前ら、後方で味方が援護しているつていいただろう！

それに、総大将である曹操も後方予備としているんだ！

お前達が、恐慌状態になつたら誰が総大将を守るというのだ！

敵軍を正面から受け止めるつて言葉だけに反応するんじゃない！

肝心なのはその後だ、後！

「はあ、もうだめだ。これでは兵士に期待することはできん。かくなる上は・・・」

俺が一人で支えるしか、それ以外に術はないことだな。

第十話 初陣 中編（前書き）

第十話の十が漢数字じゃなかつた・・・
ので修正しました。

第十話 初陣 中編

それは討伐に赴く前のこと。

「華琳様、本当に胡車児に一隊を任せてよろしかったのですか？」

これは私の率直な意見。

華琳様が胡車児に何を見出したかはわからないが、つい先日密将として用いられるようになつた胡車児に一隊を預けたのにはどんな意味があつたのだろうか。

華琳様の采配に疑いを抱くわけではないが、どうしても気になることであつた。

「秋蘭も春蘭と同じことをいつのね？まあいいわ、貴方にも説明してあげる」

姉者も同じことを華琳様に問うたのか。

確かに姉者は私よりも前に華琳様の部屋に入つて・・・そして機嫌よく出て行つたな。

闇に呼ばれたわけでもないといつのこと、一体何があつたのだ？

「秋蘭、貴方は胡車児の実力をどう見るかしら？」

「胡車児は武力に優れた者です。姉者を相手に引けを取らず・・・場合によつては打ち負かしていたかもしません。私が止めなけれ

ば、兵たちが見守る中で姉者が負けるという結果になつていたのではないかと思います」

事実、胡車児の実力は高かつた。

最初は侮辱とも取れるほど手を抜いていたが、次第に姉者と打ち合つほどの実力を私や兵に見せつけた。

姉者は好敵手と思い喜んでいたようだが、私にはまだ胡車児に十分な余力が残されているように感じたのだが・・・

それを姉者から聞いて、実際に見てみようと華琳様は思ったのだとでもいうのだろうか。

実物を華琳様自身が見て判断するというのは實に華琳様らしいが、寡兵での討伐戦でそれを行つのは危険ではないだらうか？

胡車児も私に対して慢心をするなど釘を刺してきたこともある、胡車児に一隊を任せたのは失敗だったのではないか。

「そうね、春蘭もそう言つていたわ。それに胡車児本人もそう言つてゐる。私が見たところ、彼は策謀の才能もあるはずよ？彼は意思疎通が取れないと称していたけれど、その割には私と十分に話せてゐるわ。自身の実力も十分に理解しているはず」

「ええ、それは私も思つていました。胡車児は雄弁で知恵も良く働く、それでいて意思疎通が取れないなどというのは不思議としか言いようがありません」

「それなのに、彼は武力以外に優れたところがなく、兵の統率が執

れないところ。文官の才については「はおいておくとしたし、秋蘭。普通、武力に優れた武官で指揮がうまく取れないとは、どういった者を指すかしら？」

大抵の武官は、それなりに指揮を執ることができる。

勿論、武官自身の才能もあるが、武官にとって戦闘とは極めて身近なものであり、自身の証明をするところである。

故に、武官は戦場で活躍しようと武を磨き、統率を極めんとする。胡車児の場合は、武だけが極めて優秀でありながら、統率が貧弱だと称する点にある。

それは即ち・・・

「胡車児には兵を率いた経験がないということでしょうか？あればけの武に恵まれながら、兵の指揮を執ったことが無いとは考え難いのですが」

「そう、恐らく胡車児には兵の指揮を執ったことがない。彼は武に恵まれすぎているともいえますから、これまで、彼一人で済むようなことが多かったのでしょうか。故に、彼は兵を指揮する機会を持たなかつた。勿論、諸国を行脚しているところも原因の一つでしょうけどね」

自身が仕えるべき主を探して各地を行脚しているといったが・・・なるほど、そうであれば兵の指揮を執ったことは無いだろう。

実際、出会つてすぐの武官に指揮権を与えるところと自体が異例

なのだ。

華琳様の行つた人事は極めて異例で、だからこそ私が華琳様の下に来ている。

ふむ、確かに華琳様の言つとおりである気がする。

胡車児は確かに、武に秀でているが、見方によればそれは秀で過ぎているともいえる。

彼が自身の実力ゆえに兵の指揮を執つたことが無いというのは、確かに納得できる話である。

これで一つの疑問は氷解したが・・・では、華琳様は何故、そうと知りながら胡車児に兵權を渡したのだろうか？

指揮を執つたことが無いものにて、指揮を執れとは無茶が過ぎるのではないか？

胡車児に統率の才があると、華琳様はそう判断しているのだろうか？

「華琳様、だとすればどうして胡車児に兵を与えたのです。今の言では、華琳様は胡車児が兵を指揮したことがないと想定した上で彼に兵を与えています。せめて、優秀な副官でも与えねば・・・」

「その優秀な副官がいないということは秋蘭も知っているでしょう？そもそも、私の軍はそれほど戦闘経験に恵まれているわけでもないわ。調練だけは怠らないように心掛けてはいるけど

ああ、だからこそ胡車児を推挙したのだ。

本来であれば、出合つてすぐの武官などを推挙したりはしないのだが、今回は討伐という極めて身近に戦闘を予定していたことと、胡車児が極めて優れた武を有していたからな。

ここでは逃すには惜しい、優秀な副官、いや、将官となるのではないか。

そう思つたから推挙したのではないか。

「秋蘭、貴方の懸念も尤もだけど、この討伐戦の後のことを考えてみなさい。私が明日の討伐戦を寡兵にて勝利したらどうなるかを」

「討伐戦後ですか・・・恐らく、華琳様の武は大いに認められ、現在州牧が空いているということもあり、報奨として州牧の地位が与えられるかと思いますが」

「そうね、私も楽観視をしているわけではないけど、そうなると踏んでいるわ。ねえ、秋蘭。もし私が州牧となつたら、私が率いる軍の規模はどれだけのものになるかしら?刺史ではなく州牧として、それは今は比べ物にならない規模の兵を采配することになると思うのだけど」

華琳様が州牧となれば、恐らく今回のようにたつた1000の兵を率いて討伐に向かうなどということはありえない。

というのも、現状の限界が1000人であるからこそ、1000の兵を率いて討伐するのだ。

州牧という立場であれば、より多くの兵を動かすことが可能である

わけで、1000以上もの兵を動員することは造作もないことだらう。

「それはつまり、今のうちに胡車児にはここで統率とはなんたるかを学んでもらわなくてはならない。今回の賊を軽視するわけではないけれど、賊の陣容は秋蘭も重々把握しているでしょ?」

「そうよ。だからこそ胡車児にはここで統率とはなんたるかを学んでもらわなくてはならない。今回の賊を軽視するわけではないけれど、賊の陣容は秋蘭も重々把握しているでしょ?」

今回の賊は報告によると、歩兵のみで半数以上が武器を持たぬ鳥合の衆。

なるほど、これでは実際の兵力差は悪くても2倍というわけか。

そして鳥合の衆ときたら、最悪姉者の突撃のみで士氣を瓦解させることが可能だわ。

「賊が鳥合の衆であり、貧弱な武装されることも相まって、今回は経験を積ませるに最適の機会である。華琳様はそうおっしゃるわけですね」

「秋蘭も想定しているとは思つけど、武装の整つていない賊軍相手なら私自らが行かずとも春蘭だけでも十分討伐可能でしょう。だから、今を除いて他に経験を積ませる機会はないの。それに、胡車児の指揮が不得手だとわかつた場合は私の部隊が全面に回るわ

「それでは華琳様が敵を真正面から受け止めることに。それは危険です!私が代わりに前線の部隊を押し留めますので華琳様には弓兵

の指揮をお願いいたしましたく・・・」

「秋蘭は胡車児をあまり信用していないのね」

「当然ですか。華琳様もおっしゃった通り、胡車児が兵を率いたことがない・・・初陣であつたとしたら、それだけで華琳様を危険に晒すことになります」

「ねえ、秋蘭。貴方は胡車児を見て何か感じなかつたかしら？貴方の目に映つたのは、彼が武に優れているということだけだった？私には・・・そうね、彼がとても魅力的に見えたわ。今まで男なんて大したことないと思っていたのだけどね」

華琳様が男を褒めるなど・・・いや、確かに華琳様でも男を褒めないことがないとは言わない。

確かに華琳様であれば、真に優秀な者はそれが男であれ褒めなはあるだろう。

しかし、本当に胡車児は優れているのだろうか。

華琳様の言つとおり、胡車児は非常に田を惹く存在であると思つが・

・・

「兵を率いるには確かに統率といった経験は必要でしょうけど、胡車児には誰もが持ち得ないものを持っているわ。彼が持つ魅力といつものは、統率の無さを補つてなお兵らを奮い立たせるでしょうなるほど、経験乏しく指揮を満足に執れぬのなら、魅力・・・いわば兵を惹き付け魅了して纏めあげてしまえば良いと。

戦場において最適解を求めることが出来ずとも、一致団結した部隊といつもの非常に強力であることは確か。

それに加え、経験を積んだ部隊であれば、なお強力なことは言つまでもないか。

「華琳様は遙か先を見据えているのですね。明日の討伐戦などは踏み台に過ぎず、それを経た先の未来を考えているとは」

「分かつてくれたのなら幸いよ。春蘭は・・・胡車児が使い物にならなくとも、貴方が居れば大丈夫と言つただけで舞い上がり出で行つてしまつたから」

姉者・・・姉者はどうしようもないくらいに姉者だ。

・・・

「と、あの場では納得したものの、やはりこれでは無理だろう。現に胡車児の部隊は壊乱状態、隊列は乱れ、とても戦えるような状況ではない」

華琳様はああ言つていたが、胡車児には統率の才がないとしか言いようがない。

「せうかしら？私はまだ見物しているつもりよ、秋蘭」

「なつ！？華琳様、いつのまにこじまで！華琳様の隊は私の弓隊より後方に布陣していたではありませんでしたか？」

「胡車児に前線を任せたのは私の采配。彼が無理であれば私が支えなくてはならないのだから、いつまでも後方待機をしているはずがないでしょ？」「

「ですが、危険過ぎます！敵は勢いに乗つており、前面を受け持つ胡車児隊は意氣消沈、潰走するのは目に見えています！」

「そうね、現状はどうみても秋蘭の言うとおりでしょ。だけど・・・・・胡車児を見てみなさい。あの顔を、何か企んでいるような顔に見えないかしら？」

む、確かに。

先ほどは何かを諦めたかのような態度を見せていたが、今は何かを企んでいるかのように見える。

声高々に演説をしているようだが、いったい何を・・・

「つおおおおお！胡車児隊、我に続けッ！」

壊乱状態で今にも潰走しかねなかつた胡車児隊が、急に息を吹き返し、賊軍に向かつて突撃を行う。

「ふふふ、秋蘭。私が言ったことは間違つていたかしら？」

「いえ、華琳様の御慧眼、まことに感服する限りです」

「それもこれも、胡車児を推挙してくれた秋蘭のおかげよ。今晚は可愛がつてあげるわ」

華琳様も「機嫌で、この討伐戦も大勝を収めることができそうだ。

ふむ、だがいつたい胡車児は何をしたというのだ。

今の奴が行っていることは、最前線に自らが立ち、そのあとを兵らが続くといったものなのだが・・・

討伐が終わり次第胡車児に聞いてみるか。

あれだけ乱れていた軍を瞬く間に鎮静させ、士気を高めるなどと見事としか称せない。

これも奴が持つ魅力、魅入られるとは「このことを言うのだな。

第十一話 初陣 後編

「・・・うわああああー敵だ！敵だ！敵が来るぞーもうダメだあああああー！」

チツ！一体何が原因だ！

流石に統率1だからとはいって、部隊が常に壊乱状態であるのはおかしいだろ？！

何か俺が見落としていることがあるのか？

統率能力が乏しいから、隊を満足に掌握できないことは想定していたが、これは些か行き過ぎだろ？！

練兵場で夏侯惇と打ち合い、俺自身が武に優れているところは見せつけたはずだ。

夏侯惇に引けを取らない俺が指揮をして、それが通用しない理由は・・・

なるほど、要は兵からの信用がないのか。

前面から総勢4000もの賊軍が胡車児隊目がけて突撃を仕掛けてくね。

勢いに呑まれているのは胡車児隊であり、呑みこんでいるのは賊軍だ。

多勢に無勢、今ここで留まるために必要なのは彼らを奮い立たせること。

逆境においても決して退かず、同胞を護るために踏ん張り支えようとする意思が何より必要。

だが、兵を指揮しているのは、昨日練兵場に現れたばかりの見知らぬ指揮官。

必ずしも全ての兵があの時練兵場にいたわけではなく、夏侯惇との試合を見ていなかつたものもいるだらう。

そして俺自身、統率が一だとう言葉に踊りひきされて陰鬱な表情をしている。

なるほど、確かにこれでは兵が恐慌状態に陥るのも当たり前だ。

何せ、俺は彼らから信頼を勝ち得ていないので。

彼らと共に戦つたことは無く、彼らと共に調練したことも無く、そして俺自身に合戦の経験がない。

さて、多勢に無勢が分かり切つてゐる今回の戦いで、自らを指揮する者がそのようなものであつたら・・・兵はどう感じるだらうか。

同じ、多勢に無勢という状況にありながら夏侯惇や夏侯淵の部隊は意氣軒昂であり、夏侯惇の部隊の騎兵などは今か今かと突撃の時をじれつたく待ち構えてすらぐるよつて見えてゐる。

それに加えて俺が率いている部隊は・・・

単純に、捨て駒だと、兵たちもそう認識しているのだろう。

でなければ、こんな無名の指揮官が最前線を指揮するはずがないと。

代わりに勇猛な夏侯惇が指揮を執り、前線を支えてくれるはずだと。
彼らはやつ思つてゐるに違ひない。

であるとするならば、今の俺には何ができる。

この討伐戦を持つて初陣、兵を統率した経験はなく、才能も能力値
からして皆無なのは確実。

「そんな俺がこの部隊を鎮静化させ、奮起させ、突撃を行つことはだ
うすれば・・・」

ふと右手を見遣る。

刃こぼれをした短剣を手に思つた。

自らの武具の管理が出来ぬ将官がいるだらうか？

武器に劣化を認めておきながら、それをそのままに合戦に赴くものがはたしてゐるだらうか。

所詮短剣は聖遺物での攻撃を隠すためのものでしかないと安直に考
えていたのではないだらうか。

活動段階の聖遺物は他者には見えない。

故、彼らが目にすることは刃こぼれした短剣のみであり、聖遺物である戦雷の聖剣スルーズ ワルギューレではない。

「これでは兵が従わぬのも当然ではないか。統率どころの騒ぎではない、それ以前の問題だ」

今更悟つても仕方がない。

既に合戦の幕は切つて落とされており、今なお胡車児隊に向かって賊軍が俺達を刺し殺そうと差し迫っている。

さて、どうすべきか。

この現状、如何にすれば打開することが可能だろうか？

こういったとき英雄譚ではどのよひに・・・ああ、なるほど。

まだ手は残されているな。

俺が持つていてる剣はなんであつたか。

戦雷の聖剣スルーズ ワルギューレ、かの軍人が「同胞たちが道を見失わないよう、戦場を照らす閃光になりたい」との渴望を抱いた武器ではないか。

「道、道か。切り開くだけの力はある。後足りないものは彼らを従わせる力・・・」

統率はないが魅力はある。

士氣は出来ぬが信奉をせることは不可能ではないだろう。

だが、信奉させるには結果がいる。

即ち、俺自身が突撃を仕掛けて、勝利を得ることができるとの証明をしなくてはならない。

そつと決まれば話は早い。

敵は待つてくれないのでから、進むよりほかないので。

「何気に初めての形成位階か。戦雷の聖剣を具現化するのもこれが初めて、実物を見るのも初めてだな・・・形成!」

短剣をしまい、聖遺物を具現化させる為に叫ぶ。

形成によつて具現化された聖遺物、戦雷の聖剣は蒼く、そして稻妻を彷彿とさせる独特の刀身をしていた。

「これが実物の戦雷スルーズの聖剣か。ハハハ、これではまるで英雄にでもなつたかのようだ。実に立派な剣、いや宝剣だな」

武器は整い、後は俺が鼓舞を行うだけ。

兵らに問い合わせ投げかけ、彼ら自身に同胞を護るために戦うと、その意思を持つてもらつだけだ。

失敗は許されない。

いや、曹操なら俺がこの状況に陥ることを想定していたのだろうが、ここで俺がなんとかしなければ、胡車児隊は全滅、無駄死にを増やすだけだ。

故に、やはり失敗は許されない。

たつた一度の鼓舞で壊乱状態にある部隊を高揚状態にする。

そんな経験をしたことのない俺が、俺がやらなければならぬ。

「曹魏の兵らよ、聞け！ 今お前たちは無勢という立場にありながら、多勢を向かえ討たねばならない！」

「4000という大軍を前に寡兵に寡兵を重ね、胡車児隊というただ一隊のみで前線を支えねばならない！」

「何故なら、我が隊の後方にはお前らが主君を仰ぐ曹操様を始め、夏侯惇将軍、夏侯淵将軍、そして更に後方にある陳留には家族親族である護るべきものが居るからだ！」

「負ける、勝てぬと、お前らはそう呪つて居ることだらうー。総員1000名である曹魏の兵の内、ここには胡車児隊しかいないのだ。そう思つてもわからぬでもないー！」

「だが、お前たちは、日々夏侯惇将軍、夏侯淵将軍の指揮下で鍛錬を積み自身を磨き上げてきた！ そんな曹魏屈指の精銳であるお前たちと寄せ集めに過ぎぬ賊軍どが同等であるはずがないー！」

「見ろーお前たちの背後を護る同胞の姿を！ 我が隊が前線を支えるお蔭で、彼らは安全にそして強力に我らを援護することができるー！」

「感じるのだ！決してお前たちは戦場で独りではなく、共に肩を並べ戦い、助け合ひ同胞がいるところなのだ！」

「お前たちが、無名の武官に率いられ、不安で逃げ出したくなる気持ちもよく分かる！」

「無名の武官とは私のことだ！私という存在が、お前たちを不安にさせてしまったのはまことに申し訳ない限りだ！」

「故、もしお前たちが、不安に耐え切れず逃げ出すところのあれば、それは私の責任であり、お前たちに何ら罪はない！」

「」の発言に偽りはなく、私はお前たちに突撃せよ、玉碎せよなどとは決して言わない！」

「今、胡車児隊は極めて劣悪な状況にある。壊乱し、隊列は乱れ、全力を出して戦うなどとは不可能に近い！」

「当然、」の場で踏みとどまる」とありできず、「鎧袖一触蹴散らされることは目に見えている！」

「だが、賊軍に対して攻撃を仕掛けるのであれば曹魏は勝利を手にすることが出来る！」

「勝利を確信し、浮足立っている賊軍に対して、曹魏の精銳であるお前たちが突撃をすれば打ち破れぬはずがない！」

「・・・私はこれより、単騎にて賊軍への突撃を行う。私は」にきてようやく、お前たちに進むべき道を示すのだ」「

「もし、お前たちが！未だその胸に、故郷を、同胞を細つゝ持ちがあるのであれば…」

「どうか、私が駆け抜けた後をお前たちに来てもらいたい」

「これは私の願いであり、決して命令などではない。では、胡車児隊、各自が信念に従い行動せよ！」

言い終わると同時に賊軍へと駆ける。

これで無理だとするなら俺には手を率いることなど到底無理だ。

今この場で出せるだけのものは出し切ったつもりだからな。

ま、何とかなるか？

胡車児隊の虚うな顔も次第に光を取り戻し、高揚状態に至ったと思われる。

だが、最後には彼ら自身の選択で立ち向かわなくてはならない。

行動の指針を将が示すのはいい。

だが、結局、腕を振るい敵を屠るのは彼ら自身なのだ。

彼らの腕を振るい、敵を薙ぎ払つとう行為を俺が代わってやる」とはできないのだから。

縦横無尽に敵を切り裂く。

戦雷の聖剣を前に防ぐ手段などなく、肉や骨、たとえ盾としても何もなかつたかのように両断する。

が、いくら俺が屠ろうとも敵は減る気配を見せない。

そりや当然、一振りで一殺出来るのであれば、全てを屠るのに4000振り必要だからな。

「うおおおお！ 胡車児様に続けっ！」

振り向けば、後方から胡車児隊が突撃を仕掛けている。

敵に囲まれ、思うように後方を振り返ることはできないが闇の声がここまで届いてきた。

「ハハハ、なんだ。俺もやればできるってことか？」

兵らは兵らで考え動いただけだとしても、彼らに影響を与えることができたのはやはり俺自身の力によるものだろ？。

思わず笑みがこぼれる。

「うおおおお！ 胡車児隊、我に続けっ！」

釣られて俺も叫んでしまった。

兵数から考えれば死地へ赴けといつよつなものであるが、大丈夫だ
うつ。

賊軍は大いに浮き足立ち、胡車児隊の勢いに呑まれるだらう。

死に体であった部隊が突然、翻して突撃をしてくるのだ。呑まれぬはずがない。

「胡車児隊に後れを取るな！我らが騎兵の妙技、賊軍に見せつけてやれ！」

「どうやら夏侯惇も突撃を開始したようだ。

恐らくこの分では、時期に本体も突撃を行うだらう。

勝ちは決まり、後は掃討戦といったところか。

とはいえ

「氣を抜くにはまだ早い。まずは着実に、この戦域での賊軍を蹴散らしてからだな」

胡車児隊を労うのはそのあとでいいだろ？

第十一話 初陣 反省会

「胡車児、御苦労だつたな。途中までは冷や冷やさせられたが見事な采配だつたな」

賊軍との戦闘を終え、休息中のところ夏侯淵に話しかけられた。

確かに結果だけ見れば、見事な采配と言えなくもない。

俺が率いた胡車児隊は、俺が穿った後を忠実に追随・・・まさに鋒矢の如く賊軍を食い破つた訳だ。

将兵共に勇猛果敢で、鎧袖一触、瞬く間に賊軍の士氣を喪失させた。

こういえば、まさに歴戦の英雄にでも率いられた部隊のように感じるが、そんなことはない。

現実は、胡車児隊は攻撃直前までは常に恐慌状態でいつ潰走してもおかしくない状況。

指揮官は兵の指揮を行つたことがなく、兵らは知らないが俺には統率を行う才能がない。

そんな八方塞がりの状況で一計を案じ、無事部隊を立て直すことに成功。

結果、九死に一生を得たというのが紛れもない現実だったのだ。

「夏侯淵か。いや、俺の采配は終始酷いものだつた。兵たちの気持

ちを酌んでやれなかつたのだからな。その結果があの恐慌状態だ」

「なるほど、確かに合戦を始める前の胡車児隊は見るに堪えなかつた。だが、合戦が始まり、敵陣に突撃を仕掛けの時には精銳部隊へと変わつていたではないか」

「誰もが死を前に感じたんだろう。こんな所では死ねない、まだ遺り残したことがある。そんな状況であれば、誰もが果敢に戦えるさ」

「そうかな？私は恐慌状況に兵が陥つたとしたら、間違いなく逃走を始めると思うぞ。あの状況で立て直したのは偏に胡車児の実力であろう」

「夏侯淵はやけに俺を過大評価する。俺にはそんな実力はない。今回もたまたま成功しただけで、次に同じことをやれば壊滅は必至だろ？」

「それは別に誰にでも言えることだ。誰しもが失敗する可能性を秘めているわけで、結局頼りになる者は土壇場で巻き返しが図れる者だろう」

「前提条件に満足に行軍を行える者、とあれば確かにそれは正しいが。現に俺には統率を行う才能はない。今回のことでそれがよくわかつた」

「それでもう指揮を執らないと？ふむ、だがな胡車児。貴様には統率に恵まれていなくとも、類い稀な才能を有している。それが何かわかるか？」

「わからん。少なくとも、俺が自信を持つて言えることは単騎で駆

「魅力だよ。いや、人を惹き付けると言つた方がいいだろ？　胡車児には、兵を熱狂させる才があると私は思つ。これは、華琳様も同意見だ」

「……俄かには信じられんな。一体何を根拠にそう思つ。兵を熱狂させるだと？　現に俺の隊は死に体の恐慌状態だったのだぞ？」

「ああ、そうだな。確かにあの状況ではそうだつただろう。だがな、今の胡車児隊を見るがいい。あの喝采を、あの熱氣を。あれは全て胡車児、お前が指揮をしたからこそものなのだぞ」

「……そうだな、確かにそうだ。今回の件を以て、奴らは何の疑いもなく俺に付き従つてくるのだろ？　寡兵よく大軍を破る、まさにその経験を『』えてしまつたのだからな」

「故に、胡車児。お前が将官として戦場を離れることはできん。彼らの期待に応え、兵を指揮しなくてはならないのだよ」

「そう、そだとしても俺が俺を認められん。夏侯淵の言つことは良く分かるが、先に俺が話したことは全て事実なのだ。万事において満足に統率出来ぬ以上、俺にはできぬよ」

「ははは、胡車児、思考が硬直しているぞ。確かに、お前は長所もあり短所もある。先を考えるのだ、出来ぬからやらぬではなく、出来るようになると。今回の討伐戦でお前の実力は華琳様も拝見なされた」

「ああ、そうだろうよ。で、夏侯淵は何が言いたいのだ」

「胡車児、一人で出来ぬなら頼れば良い。華琳様はお前の実力を鑑みて自らの副官に任命することにした。兵の采配に関して華琳様の右に出るものはない。存分に学ぶといい」

この後も夏侯淵と長い答弁を交わしたが、決して折れぬ夏侯淵を前に俺が先に折れた。

嫌々な顔をして首肯したが、あいつはそれでも満足して去つて行つたな。

やれやれ、どうして俺にそんな役をやらせたがるのだ。

曹操の副官となることは別に構わない。

未だ主君と認めたわけではないが、そういうた関係になるのは俺が望んでいたことであり不満などありはしない。

が、どうしても指揮を執らせたいらしい。

確かに、指揮を執れるものが増えればそれはそれで采配に多様性が出来るだらう。

だが、リスクが高すぎると俺は思うがね。

「学ぶ、か。一度と部隊を危険に曝さぬよつて、初期値がどうであれ成長するしかない」

「ええ、大いに学ぶべきよ。胡車児、貴方は武官として完成していると言えるほど武に優れている。けれど、それでは不完全、将とし

ての才もあるのだから必死で学びなさい」

夏侯淵が去つて今度は曹操。

いつの間にやら人氣者になつてしまつたかな。

「将として学ばせる為に俺を自身の副官にしたのか？」

「さうよ、光栄に思ひなさい。そして私を失望させぬように努力しなさい」この曹孟徳が胡車児、貴方に將官としての才があることを保障してあげる

「期待されていいると思つて良いのか？あれだけの失態を仕出かしておきながら、それでも尚期待するのか？」

「貴方は欠点を認識できていいるのだから、私は何一つ咎めたりはない。そうでなければ・・・そうね、首でも刎ねていたかしら？私の好奇心が過ぎたこともあつたでしょうけどね」

「今、この場で刎ねておいたほうが後々に悔いことがある……いや、失言だつたな」

「霸道において悔いるなどといつ愚行はない。よくわかっているわね、胡車児。それで、貴方は罰が欲しいのかしら？無罪放免が気に入らないなら、私が誇れる將官となりなさい。それが貴方に与えられた罰よ」

「参つたな。誇れる將官となれ、か。簡単に言つてくれるねえ」

「あら、貴方になら出来るでしょう？ま、時間がかかったとしても

気にしないわ。才ある者は好きだけど、才が磨きあがつていぐのを見のも、それもまた好きよ」

人材マニアの曹操の名は伊達じやないつて奴か。

ま、俺も成長物の英雄譚は好きだから、原石が磨きあがつていぐ様を見るのが好きという気持ちも分からんでもない。

どの道、俺は変わらなければならぬのだ。

一度とあんな無様な真似をするわけにはいかない。

主君を同じような目に合わせる「ことだけは絶対に避けなくてはならないからな。

そんな俺の都合と、曹操の期待が重なるだけ・・・そうそれだけなのだ。

彼女の期待にも応えるために、ここは物語の主人公らしく頑張りますか。

と、その前に一つやることが

「・・・改めて名乗つておいつ。姓は胡、名は車児、字は持たん。真名は直衛だ。これからもよろしく頼む、曹孟徳殿」

「華琳よ。直衛、これから私のことは華琳と呼びなさい。正式な任官となつた以上、そんな他人行儀な呼び方は許さないわ。後、春蘭と秋蘭とも真名を交換しておくれつこ」

真名を交換するまでに要した時間は僅か一日か。

それだけ密度の濃い時を過いじていたといえばそなのかもしれないが、些か進み過ぎであるようだ。感じる。

悪いことではないから気にする必要もないのだが・・・

何か嫌な予感がしないでもない。

気をつけておかないと、とても悲しいことになるような。

「曹操様、夏侯惇將軍からの伝令です！賊軍を追撃した先、山中にて賊軍の根城を発見。規模は2000名程とのことです」

「深追い無用。夏侯惇將軍は至急、本隊と合流せよ。そう伝えなさい。」
「苦労、下がつて良いわ」

とこつことせ、今回の討伐戦はここで切り上げて、根城を落とすのはまた次回といふことかな？

糧秣も余分に持つてきているわけもなく、兵に余裕があるわけでもない。

寡兵である故に、負傷兵の数は戦力に大きく響いてくる。

それに攻城には三倍の兵力が必要だといふ。

皆もその例外ではなく、攻めるのであれば少なくとも糧秣は万全に、将兵の傷は癒しておく必要があるだろう。

つまり、一旦陳留に戻る以外に術がないということか。

「根城を見つけたが落とすのには糧秣が心もとないか？死傷者は少なく、行軍することも不可能ではないと思うが」

「・・・胡車児隊は逆境からの快進撃、兵たちは精も根も尽き果てているわ。何故か目だけは輝いているけれど、戦闘に耐えられるとは思えない。継戦は現実的ではないわね」

目だけは輝いているって・・・行きとは逆の現象か。

やれやれ、俺に付き従つてびつするところのだ。

ビツセナラ、夏侯淵に付き従えばいい。

あいつなら無闇矢鱈と兵を危険に曝す真似はしないだろ？から。

「わざわざ、俺の隊を例にしてくれてありがとう。ま、糧秣に関しては、街から徵発するのも手段だろう。我々が去ることにより再び危険に曝されるというのであれば、彼らも協力すると思うが」

「それは期待できないわ。既に、報告の任を受け街に向かわせた兵が門前払いを受けた。新手がいるということは知らないことはいえ、それがあの街の態度というわけよ」

「あの街は県令が治めていたのだろう？そして、しばらく統治者がいない間に民が十分な自治権を持つたと。大方、一部の層が自治権を奪われるのを恐れ、拒んだのだな。となれば、全軍で陳留まで帰還するしかあるまい」

分からぬでもない。

税を納める立場から、税を集め立場に変わったのだ。そう易々と譲るには、魅力がありすぎる立場ではある。

色々言いたいことはあるが、華琳は陳留刺史であり、かの街は支配域ではないからな。

陳留まで下がり、補給を済ませる必要があるだらう。

野営を行い、糧秣を待つのも手ではあらうが、ここでは満足に負傷兵を癒すことができん。

「ままならないわね。直衛の言つとおり、一旦陳留まで戻り、兵站を整えてから出直したほうが良いでしょ」

「それもこれも、華琳が刺史だけでなく州牧も兼任する」ことが出来れば、一気に解決する問題ではあるんだがな。ま、賊軍を討伐後、委細を報告して・・・報酬に州牧位も貰えたら完璧だろうなあ

「無い物を強請るのはやめなさい。今出来ることを考え行動するのよ」

「

尤もな話でござります。

「せついいえ、直衛。貴方はそちらの話し方が素なのかしら？そして今まで猫を被つていたと」

「立場と距離を弁えていたつもりなんだけどな。ま、素はこんなもんだ。堅苦しいのは苦手でね？間違つても、俺を外交の場になんか

連れて行くんじゃないぞ。連れて行つたとしても外で待機が最適だ

「このまま話していたらまたアレコレと言われて……気が付けば言いくるめられているに違いない。

「こいつときはさつさと逃げる。退却の準備もしなくてはいけないからな。

「待ちなさい！まだ話は終わっていない……流れ星？」

案の定、華琳が俺を追ってきたが不意に立ち止まる。

流れ星といつていたからには、彼女の目には流れ星が映ったのだろう。

今はまだ昼間だがな。

「昼間に流れ星ね。見間違いではないのか？」

「いいえ、確かに流れ星が見えたわ。不吉ね……」

流れ星が不吉か。

日本なら願い事をしてそうな気がするけどな。

つまりは吉兆扱い、「ちがいとは性質が逆のようだけど。

「不吉ね。なら、さうだと退却するか。どの道、無為に時間を潰すこともないだろつからな」

「さうね。陳留へ戻りましょ。兵たちも十分に休めたはず、行軍を再開できるでしょう」

俺も兵を纏めに行くとするかな。

ま、行きとは違つて帰りの行軍はマシになるだらう。

さつさと帰つて、戦仕度を整えて、再度討伐だな。

とはいっても、負傷兵の治療や国への報告、失った兵の補充とその調練に暇がないから即時出立は無理だうけれど。

その間俺は・・・

第十二話 陳留にて 一時の休息（前書き）

累計 PV：148,401 ユニーク：18,786人 ありがとうございました。

第十二話 陳留にて 一時の休息

「その間、俺は華琳による特別講義を受けていた」

「直衛・・・私も暇じゃないの。私直々に采配とは何たるかを教えているのだから眞面目に聞きなさい」

華琳がハリセンを片手に俺の頭を叩く。

講義つていうとどうにも眠くなるので、わざわざハリセンを作つて華琳に渡した。

聖遺物使いであるから痛みなの感じるのはもないので、音だけはしつかりでるので音を聞いて起きることにする。

材質は当然木製、結構重くて痛いはずなのだが俺には関係のない話だな。

「痛たた・・・どうにも納得がいかないわね。直衛の頭を叩いているのは私なのに、どうして貴方は痛がらず私が痛い目にあうのかしら?」

「そんなことないぞ。痛たた・・・ほら、俺も痛がっているだろう。それに、木製なんだから反動で華琳の手が痛むのも仕方がないことだと思つ」

現実には、与えた衝撃がそのまま華琳に返つてきている様なものなのだ。

鉄柱を木材で殴りつけると言つか、そんな感じだからな。

「罰してこるはずなのに、全然与えている感じがしないわ」

「はいはい。それは置いといて、本日の講義の方をよろしく頼みます」

「本日も何も、今日から始めるのだけど。とりあえず、直衛には行軍について学んでもらうわ。これがうまく出来るか出来ないかで兵の疲労度も変わってくるから、重大よ」

行軍、行軍かあ。

確かに行軍は大事だな。

兵を可及的速やかに前線へ送り込み、且つ兵に疲労を『えず戦闘力を保持したまま輸送する。

いくら迅速な行軍、強行軍等で開戦に間に合つたとして、疲労困憊で戦えぬというのでは意味がないからな。

「だからまず、直衛には騎乗の練習をしてもらうわ。貴方、前の討伐戦では騎乗せずに徒步で移動していたでしょう？大方、馬に乗つたことがないからこそ徒步なんでしょうけど」

「げ、なんだと？！」

華琳の言ひ方とは確かに当たつている。

俺は馬に乗ったことはないし、だからこそ討伐戦においても徒步で行動していた。

だが、それ以外にもだな・・・俺は馬が嫌いなのだ。

馬というか動物全般が嫌いといつか・・・

猫は手を差し出せば引っかいてくるし、犬は撫でようとするが噛み付いてくる。

前世の友人の家でインコに触れようとしたときは突かれた。

友人は普通に腕に乗せていたのだがなあ。

ま、そういうわけで俺は動物はあまり好きではない。

好きではないので騎乗なんてしたくないのだ。

「いや、俺は馬に乗らずとも持ち前の俊足があるからな。それに、兵と同じ視点に立つて共に戦うとこ、兵達に近い立場で・・・

「だめよ。将官は馬上で指揮を執りなさい。将官に与えられた責務は、兵が満足に、万全に戦えるように指揮をすること。決して、兵と共に戦い汗を流すことではないわ」

「だが、そういうた将官がいても悪くはないだろ? ほら、共に戦ってくれる将官は心強いな・・・なんて」

「合戦が始まつてからなら構わない。貴方の武器は短剣と長剣でしょう? 馬上でそれを振り回したところで届かないのだから、そんな

「ひとをじりとは流石に言わないわ」

よしよし、攻めるなりの線か。

「なら行軍中も騎乗しなくても問題ないだろ？ 常在戦場の如く、常に陸に足を付けているべきだ」

「強行軍として駆けるときも貴方は馬を使わないとでもいうのかしら。兵もそりだけど、指揮官が疲労困憊で動けないなんて最低上」

「ひ」

いや、実際に疲れないのだから気にしないでもらいたいのだが・・・

「むむむむむ・・・。華琳わかったよ、今度から騎乗する。騎乗はするけど、今は采配についての講義だらう？だから今は講義をしよう」

「ひ」

「既に講義の最中、直衛は講義と聞いて座学を思い浮かぶのかもしれないけど、当然実技も含まれるに決まっているでしょう」

「どうしても俺を馬に乗せたいのか」

「ええ、乗せたいわ。だから早くしなさい。まずは厩舎で貴方に相応しい馬を見繕わないと」

「厩舎に相応しい馬がなければ乗らなくともいいか？」

「無ければ買つまでよ。当然、その費用は貴方の給金から引いてお

くわ

給金、まだ貰つた事がない初任給から強制徴収を受けるわけか。

しかも欲しくもない馬代が差つ引かれるなんて・・・

「愚図愚図してないでさつせと行くわよ。それとも、もう一度叩かれたいのかしら?」

いや、叩いても華琳が痛いだけなんですけどね。

俺が叩かれて厩舎に行かなくて済むといふならそれはそれで構わないのだけど。

と、嫌そうな顔をしていたら再び華琳に叩かれた。

「痛たたた・・・べうじてかしら。手加減無しで叩いたのに全然痛そうじやないのだけど」

「頭が堅いからな。考えも硬いんだ」

これ以上文句を言つとハリセンじや無しに、華琳愛用の鎌^絶で切られそうだからな。

この辺にして渋々付いて行くことにしよう。

流石に鎌で切られて無傷どころのはおかしな話になつてしまつ。

「ちなみに、直衛は何か希望があるかしら? 色だとか気性だとか、大抵の馬は一通りあるから好きな物を選んで良いわよ」

「特に無いな。というか馬に乗ったことがないのだから、聞かれて
もわからん。精々直感で選ぶくらいだ」

厩舎に向かうながら華琳と談話。

いや、これも講義の内か。

とはいつも、俺が馬について詳しいわけがない。

毛並みなんかで馬の良し悪しが分かるわけでもないからな。

乗って駆ければそれで十分じゃないのか？

まあ、早ければ早いに越したことはないのだろ？

「経験がないなら温厚な馬がいいかしら？ 気性の荒い馬に乗せて振り落とされるのも、それはそれで見ものではあるナビ。今回は乗馬の練習を行うのだから、温厚な馬で行きましょ！」

「気性が荒くて振り落とされる？ 気性が荒いとしても鎧が付いているのだから、容易に落馬するとは思えんのだが」

「バランスを崩せば誰でも落馬するわ。乗つて停止するだけなら兎も角、それで駆けるのだから十分に経験を積んでいなければ尚更のこと。だからこそ騎兵は数が少なく、練度を上げるのに時間がかかる。それで、鎧だつたかしら？ 初めて聞く言葉ね」

あー、でも確かに落馬で死ぬとかそんな話も聞いたことがあるようだ。

となれば、バランスを崩せば鎧があらうとも容易に落馬する危険があるのか。

まして、騎乗しつつ戦闘しようるものならどれほど練度を必要とするのか・・・

でも、華琳の話を聞くところ、この世界には鎧がないらしい。

ということは、未だ発明されていない技術というわけだな。

どの道俺が騎乗することになれば使うことになるだろうから、先に華琳に話しておいて俺の分の鎧を作つてもらうとするか。

「聞かれても俺も詳しいわけではないのだが、確か鞍から馬の側面側に一対の足を乗せるものを吊り下げるのことを言う・・・はずだ。これで騎乗戦闘が容易になつただとか、そんな話を聞いたことがある」

「なるほど、確かにそれなら騎乗中の安定性が増し、落馬の危険性は下がるでしょう。鎧を用いれば、兵が馬に慣れる時間も短縮され、大規模な騎兵隊を組織することも可能になるわ。直衛、貴方はこれをどこで知ったの?」

「仕えるべき主君を探して、大陸中を西へ東へ旅すれば知識だけは増えるや。ま、どこの誰に聞いたかは覚えていないが、この大陸から東に海を越えたところにある民族が使つてているとか、聞いた奴はそういうてたかな」

まさか鎧は別の世界で学んだ知識です。とは言えないからな。

「大陸の東、海を越えて、か。直衛、悪いけど今日の講義はここで終わりよ。貴方は燈の設計図を書いて職人に渡してきなさい。草案でもいいけれど、その場合は十分に意図を伝えること。また、それは門外不出の案件とすること。分かつたらさつさと行きなさい」

「こいつ」とは、俺は馬に乗らずに済むところとか。

華琳は、俺が馬に乗ることよりも燈を軍に普及させることのが大事。
・・まあ、大事だな。

ともあれ、馬に乗る必要がなくなったのはいいことだ。

代わりに燈の図面を書けなどという仕事は増えてしまったが・・
何に書けばいいのだ。

紙はあるのか？

この時代に紙があるのかは知らないが、あつたとしても非常に高価
なのではないか？

となれば羊皮紙とか、場合によつては木簡や竹簡に書くということ
だが・・

まあいい、それは何とかしよう。

最悪口頭で伝えても何とかなる気がしないでもない。

非常に簡易的な形で俺が作つてもいいのだからな。

「言つておくけど、直衛は結局馬に乗るのよ。今回は生憎のところ
鎧が用意できないから延期となつただけのこと。次回の講義は期待
してなさい」

ですよね、そうだと思ったよ。

第十四話 陳留にて 職人の技

「胡車児様、これがご注文の鑑でござります。胡車児様のご希望通りに作りましたが、行違いがあるといけません。どうかご確認のほど、よろしくおねがいします。」

今日は昨日職人に発注した鑑を受け取りに来た・・・のではなく、進行状況を確認する為に来たのだが

もう終わっているとか、どういうわけだ。

華琳が薦めてくれた職人だからといえばそれまでだが、言った次に出来てるのは普通は思わん。

しかも、俺の想像通りの出来映えで行違いなんでものはない。

完璧で、そして早い。職人技とはこのことか。

「早いな、実に早い。そして実際に確認するまでもなく分かるが、完璧だと誇れるほどに精巧に出来ている。代金は後で届けさせるが・・他に何か欲しいものはあるか?」

これだけの成果を出したのだ、代金だけでは足りまい。

何か別途報酬を出してやらねば問題となるだろう。

何せ、結局設計図面は作れず、草案も書けず、口頭説明と手製の簡易鑑だけだからな。

いや、書こうとは思つたのだが、机に向かうとなると妙に眠くなつて一向に進まない。

それで書くのは諦めて、自作で簡易な鎧を作り職人に説明したのだ。

もしかしたら、俺は春蘭よりも書類仕事が出来んのかもしれん。

流石の春蘭でも書類仕事で居眠りすることはないだろうからな。

「何か欲しいもので」「ありますか？」

「ああそつだ。私の権限の範囲で貰える物であれば、叶えてやるわ」

とは言つても、今の俺に出来ることは少ないがな。

未だ給金を貰つていない訳だ、所持金は初めて陳留に来たときに売り払ったコートの売却金くらいしかない。

「でしたら、今後もこのような機会がありました折には、是非とも私共にお任せいただきたく存じます」

む、物品ではなく繫がりが欲しいときたわけか。

これは、どうだろ？

承諾したら職人との癒着になるのか？

腕は確かだから約束せずとも再び頼みに来るとは思つが、契約不履行だと他の職人を頼つた際に言われるるのは拙い。

何より一番怖いのは華琳だな。

唯才を好んではいるが、癒着とも取れる不正は認めぬだろう。

ある種の巣廻はするだろうが、癒着と巣廻の判断をするのは彼女だからな。

ハリセンで叩かれるくらいで済めば良いが・・・さて、どうするか。

「胡車児様がお持ちになられた鎧といわれる技術、まさに感服するものであります。今後も稀代の発明とも思われるものを閃かれた際には、是非とも私共をご利用頂けます事よろしくおねがいします」

なるほど、常日頃の取引ではなく、鎧のような技術開発に際してかな。

これなら問題あるまい。

実績があり、華琳が薦めるほど腕を持つのだから、次回も次々回も彼に任せて問題はなかろう。

「良いだらう。お前の腕の良さは拝見させてもらひた。その腕が衰えぬ限り、誰にも引けを取らぬ限り、私はここを訪れよう」

華琳の治める都市で一番の腕であれば不満など出ようはずがない。

ま、口約束といえばそれまでだが、ここまで言つた以上は守りねばなるまい。

一先ずは完成した鎧を持って華琳の下へ向かつとするか。

華琳には口頭説明のみで、実際に運用したわけではないのだから使い心地を聞いてから大量生産に入らう。

とはいって、歴史的に優秀であり、不採用とされることはないとさる。

強いて言えば、生産に掛かるコスト的な面であつて、まず採用は間違いないだろう。

「む、なんだ直衛、お前もここのを利用しているのか」

物思いに耽っている間にどうやら秋蘭が来ていたようだ。

「いや、今回が初めてだな。そういう秋蘭はいつもここを利用しているのか？」

「ああ。ここので作る矢は精巧でな。また頑丈でもあり重宝している。次の討伐日程も決まつたことだから、発注しておこうと思つたのだ」

聞き捨てならないことを聞いた。

討伐日程だと？

いや、確かに今日は朝議があつたが、そんなことを言つていたか？

「秋蘭、討伐日程の件だが、今日そんな話があつたか？俺は朝議は終始出ていたが、そんなことは聞いた覚えがないのだが」

「直衛は物覚えが悪いな。私が知つていて以上、少なくとも今朝の朝議で話されたのは確實だが・・・起きているのにも関わらず覚え

ていなことは、華琳様にまた叩いてもらわねばいかんな

華琳も秋蘭も叩くの好きだねえ。

俺は叩かれるのは好きじゃないんだが。

「で、討伐日程はいつに決まったんだ？」

「糧秣、軍事物資、練兵終了時期を踏まえて、討伐時期は来月とのことだ。どうやら騎兵の装備を一新するらしく、その為に来月という日程になつたと言つ話だが・・・それが例の鎧という奴か？」

「ああ、これが鎧だ。一品完成したから華琳に報告、その後試乗会をして満足がいけばそのまま生産。足りぬ点があれば改善といったところだな」

「なら私も付いていい。私も鎧には興味があつてな。もしそれが華琳様がいうように、騎乗時に有利に働く者であれば騎射も容易にできることだ。機動力のある弓兵は得難いものだから非常に興味がある」

騎乗戦闘は熟練の兵でなければよほど運用が難しいということか。

俺は馬に乗ったことがないからわからんが、それも鎧によつて緩和され運用し易くなる。

ふむ、これで曹魏の軍は極めて精強になるということか。

欠点としては、鎧は馬に付けるだけであるから他国も容易に真似をすることができるという点。

歎獲を防ぐことは当たり前だが……俗に軍師と呼ばれる知恵者が見たら容易に再現されそうだな。

だが、それまでは情報封鎖を行つて間違はあるまい。

少しでも技術発展を遅れさせるのは当然の行いだからな。

つと、秋蘭は既に発注を終えているようだ。

考え込んでいた俺の方をまだかまだかと言つた顔で待ち構えていた。考え方の邪魔をしないでくれるのはありがたいが、別に構わないのだけど。

「ほり、行くぞ。・・・直衛のその考え込む癖はどうにかしたほうがいい。戦場で考え込めば敵に隙を見せることになる。いくら手練であろうとも、隙があれば窮地に陥ることもあるのだからな」

「それは俺も理解しているが、どうにも癖というか、な。考えながら行動するといふことが苦手なんだよ。特に平時は無理。危機的状況なら何とかなるんだけどな」

「ほう。華琳様に常駐戦場の心得を説いていた直衛が平時において呆けているのか。大体、華琳様の副官でありながら危機的状況に陥ることが許されると思うのか？」

「許されん話だな。ま、心配せずとも俺が傍にいる限りは華琳をそんな目に遭わせたりしない。そういうえば、朝議では討伐日程以外に何か別の話はなかったのか？」

朝議のことを秋蘭に訪ねながら華琳の下へ向かう。

実は朝議に出たことは覚えているのだが、何を話していったか覚えていないんだよな。

仲間が増えただとか、そんな話をした覚えがあるのだけど。

「直衛、やはりお前は駄目な奴だな。朝議で話されたことは、討伐日程、治水工事、後は客将を出迎えたことだ。どうだ、どれか一つでも覚えていたか？」

「討伐日程は覚えていなかつた。治水工事も担当ではないので覚えていない。客将については記憶の片隅に微かにある。で、誰が客将で来たんだ？」

「それは記憶にあるとは言わん。先ほど客将といつたが正式には客將1名と正規が2名だ。姉者が治安強化の為、陳留近辺を警戒していたところを・・・保護したのだ」

春蘭が保護をするねえ。

春蘭なら不審者を見つけたら問答無用で捕縛しそうなんだけれど。

ま、秋蘭が口を濁したといふことは、そういうことで間違いないのだろう。

「保護か。誰かに追われていたとでもいうのか？」

「・・・姉者が不審者と思い問答無用で捕縛しようとしただけだ。

そこで客将である趙雲と打ち合い、陳留にいる私の下まで報が届いたのだ。夏侯惇様を止めてくださいとな」

趙雲？！

趙子龍が陳留近辺にいただと？

趙雲は・・・確かに公孫賛の下で武官を務め、その後に劉備の下に向かつたと思ったが。

やけに史実と食い違う気がするが、これも俺が介入しているせいいか？

とはいっても華琳の方針に口を挟んでいるわけでもないのだが。

「それで秋蘭が三人を保護したと。そんな経緯でよくも2人が任官、1人が客将になったものだ」

「趙雲は華琳様お手製の醸造酒を甚く気に入つて、暫しの間客将となるようだな。華琳様を自らの田で見極めるまでは任官しないといつていたが・・・さて、どうなるか」

華琳を受け入れられぬ者は恐らく王道寄りの思想。

彼女の道は霸道であり、徳による統治を田指す王道とは異なる。

とはいっても、民からしたら同じだとは思うがね。

結局、第一に求められるのは身の安全なのだ。

これは武を無しに成立することはないのだから、王道もまた霸を必

要とする。

趙雲は歴史的に見て劉備の配下であつたことから王道寄りであつたが・・・

「春蘭と打ち合えるほどの武を持つのであれば是非共に戦いたいものだな。武官が多ければ多いほど攻撃の幅が広がる。他の2人についてはどうだつたんだ?」

「稟と風のことか。稟は元々華琳様に仕えるつもりだつたようで渡りに船だと喜んでいたな。風も同様だ。共に文官で今は華琳様が相手をしていると思うが・・・どうかしたか?」

稟と風が。

む、思い出しだぞ。郭奉孝と程仲德と言つていたな。

確か、真名も交換したはずだ。

朝議の時間は寝ぼけていて覚えていないけどな・・・目を開けたまま寝るのが得意なんだ。

それでいながら返事も出来る。地味に誇れる特技だったからな。

「いや、秋蘭の話を聞いて思い出したのだ。稟と風は文官扱いで、今度の討伐戦の如何によつて軍師の採用が決まるんだつたか?現状、華琳の下には文官が少ないから嬉しいかぎりなんだが

これで曹操陣営の筆頭軍師が2名と劉備陣営の名将が一人、華琳の下に来たわけか。

しかも史実より早い加入。まだ、黄巾の乱も兆はあるものの始まつてはいないのだ。

これはかなり良いスタートを切れるのではないだろうか。

「そうだな。私から言わせてもらえば、姉者も直衛も文官の真似事くらいの処理能力があればうれしいのだが」

それは無いもの強請りと言つやつだ。

作業効率を考えず、期限のない仕事であるのなら問題はない気がするが

どちらかを満たせと言われると俺では厳しいだらつ。

「俺は武官としての責務を果たすので手一杯だ。とても文官の真似事など出来んよ」

手が足りないなら公募するよつて進言してみるか。

とはいっても刺史の立場では給金の問題が生じるであろうから、文官を集めるのは州牧になつてからになるが。

前の討伐戦の戦果も報告したものの、結局州牧にはなれなかつたらな。

あまり漢王朝が機能していないのだろうか？

時期的に皇帝は靈帝であろうから、機能していないのも当然だとも

言えるのだが。

ま、流石に次の討伐戦で戦果報告を行えば州牧になれるだろ？

前回と同様に、寡兵よく大軍を破れば間違いあるまいし、今度は趙雲、郭嘉、程？と将官には不足が無い。

賊退治で將官全員を連れて行く必要があるのかという面子だからな。

「武官としての責務か。確かにそうだな、直衛には華琳様の副官として華琳様を護らなくてはならない。他に感けている余裕はないか」「いや、文官の真似事が出来ぬからそいつたのだが、秋蘭は何やら勘違いしてしまったようだ。

これ幸いと、文官仕事はこの際放棄することにしてやつ。

確かに、華琳を護るということは大事だからな。

念願の騎士の役柄でもあることだし、専念して務めるべきだろ？

「だから、直衛はまず騎乗練習から始まるといい。華琳様の傍にいるには必要不可欠なことだから」

・・・お前もか、秋蘭。

第十五話 陳留にて 火急の報

「直衛、お前もたまにはやるではないか。この、なんだ、鎧というものは実に勝手が良いぞ」

自身の愛馬に鎧を付け、駆け回り小躍りしているのが春蘭。
どうやら、鎧が甚く気に入つたらしい。

俺が発明したものではないのだが、春蘭の喜び具合を見ると誇らしくなる。

盗人猛々しいとはまさにこのことだが、生憎この世界では俺が先に世に出してしまったからには仕方あるまい。

「気に入ってくれたのは良いが、しつかり戦果も挙げて貰わないと困る。次の賊討伐に間に合うよう、昼夜問わず緊急生産を行つているんだ。経費も余分にかかるつているのだからな」

前に作つた試作品・・・というか、完成品を用いて試乗したところ、将官、特に春蘭や趙雲には好評だった。

鎧の位置は個人差があるので、馬上での安定性は向上され以前の騎乗突撃よりも迅速で、且つ強力な行動が可能であるらしい。

主に騎兵を指揮する将官だけでなく文官である稟や風などからも好評を受け、結果、満場一致で鎧の導入が決定された。

そして今現在、急ピッチで鎧の生産が行われている。

指揮を執る将官を第一に、部隊運用に欠かせない下士官に配備、その後騎兵隊に配備を行う。

かれこれ、緊急生産を行つてゐる期間は3週間近くになるが、配備率は7割程度。

職人の疲労による生産性の低下もあるが、何より材料の入手に時間がかかるつてゐる。

緊急的に生産する際は、大抵の場合供給量を上回る需要が発生するために、物価の上昇が起きる。

が、今回は物価の高騰を防ぐ為、陳留だけでなく周辺都市にまで買い出しに向かうことになり、材料入手までに多くの時間を要することになった。

ま、その時間的なロスを考えても期日までに間に合つといふのだから、職人の腕というものは實に心強い。

「わかつてゐる、わかつてゐる。これだけの品なのだ、しつかりと戦果は出す」

「ああ、そうしてくれ。後、配備が行き渡つた兵には鎧に慣れるよう、よく調練を行つてくれ。孔子に論語だとは俺でも思うが、不慣れでは逆に効率が落ちるかもしかんからな」

「当然だ。ではな直衛、私はもうひと走りしてくるぞ」

春蘭は俺の話を分かつてくれたのかそうでないのか分からぬまま行

つてしまつた。

ま、春蘭に鎧が渡されたのは今日だから仕方がない話もあるか。

春蘭の鎧は使う都度に改善要求が為され、完成品を渡すのに3週間もかかりてしまった。

主に騎兵を運用する彼女だからこそ、妥協など出来ぬ案件であったのだろうが些か妥協点が高すぎると思わないこともない。

「姉者は相変わらずだな。斯く言ひ私もそうなのだが、鎧は實に良いものだと思ひ」

「なら、鎧を生かして弓騎兵隊でも新設したらどうだ？騎馬兵の機動力を生かしつつ、弓兵による射撃を行うというのは強力だと思うぞ。偽装退却という戦術もあるわけだからな」

「弓騎兵か。なるほど、確かにそれは良い考えだ。実際に運用をしよつとすると今回の賊討伐には間に合わないが、今後を考えると十分検討の余地がある」

弓騎兵隊を新設することができれば、合戦において非常に強力な遊撃部隊となることだろう。

側面や後方に回り込んで騎射を行い即時退却する一撃離脱戦法を始め、離脱すると見せかけて後方射撃を行う偽装退却也非常に有効な戦術である。

ま、弓騎兵は両手を使つていう関係上、かなりの騎乗演習は行われば実用化は難しい。

今回の討伐戦は間に合わないのは当然だが、次の合戦までに間に合うかどうか・・・

それでも、運用できるようになれば活躍は期待できる部隊ではあるのだが。

「弓騎兵に関して一田の長があるのはやはり遊牧民だらう。交渉を行つには難のある相手かもしれないが、成功すれば得るものは大きいと思ひづ」

「遊牧民と言えば匈奴だな。彼らの使つ弓は古くから漢を苦しめたといつ。確かにその弓が手に入れば、より精強な弓騎兵が編制できるだらう」

「ま、そつはいつても騎兵以外に鎧が行き渡るのは相当先だらう。現状の生産量をこのまま続ける訳にもいかないわけだからな」

「その間は情報収集に徹するとしよう。どうやら弓騎兵新設の草案を書くだけでも解決しなければならない案件は多そうだからな。では、私はこれから弓騎兵新設の検討に入らせてもらうよ」

思い立つたが吉田とでもいうのか、秋蘭は去つて行つた。

が、秋蘭はいつの間にいたんだ？

俺は春蘭の馬に取り付ける鎧を渡す為に厩舎に来たのだが、その時に居たのは春蘭だけ。

気が付けば秋蘭がいて、ついつい話をしてしまつたが・・・

ま、細かいことは気にしなくてもいいか。

同じ職場で働いているのだからどうかで会つひとも十分にあるだろう。

う。

「お兄さんは」なんというで何をしてるんですか？」

「ツーなんだ、風か。驚かさないでくれ」

またしても、気が付けば隣に人がいるわけだが。

彼女は最近、といふか三週間前に華琳の下に来た。

姓を程、名を?、字を仲徳、真名を風。

文官としての才は極めて優秀、且つ知略にも長けていいる典型的な軍師役と言えば良いのか、華琳からの評判は上々のようである。

これもまた史実通り・・・女性でなければだが。

俺と彼女の関係はそれほど親しいと言つわけではない。

会議の場や賊討伐の軍議などの場では話すが、春蘭や秋蘭ほど雑談を交えて親睦を深めたことがないのだ。

武官と文官という畠違いであるのが原因か、あまり調練場や厩舎に来ないからな。

俺が庁舎に行けばいいのかもしけんが、書を読むのは眠くなるから

遠慮してくる。

だから、あまり接点のない彼女がここにいるところのは珍しい話で、何か用があるのでうなづく。

「今は何もしていらない。先ほどまでは春蘭、秋蘭と話していたけど。それはそうと、風がここにいるのは珍しいと思つたが、どうしてここにいるんだ?」

「風ですか? 風はお兄さんを探していましたのですよ」

俺を探していたのか。

華琳か誰かが俺を呼んでいて、それで風が使い走りにされたということだろうか。

探される毎に下手を打ったことはない……と思つんだがな。

「俺を探していたのか。それは手間をかけさせたな。で、誰が探していたんだ?」

「風がお兄さんを探していたのです。場合によっては華琳様が探しにいたともいうかもしませんねー」

風が俺を探していて、理由は華琳にも関係がある。

やはり使い走りにされているのか、もしくは彼女と俺双方に関わる問題であると、そういうことなのだろうか。

「とにかくで、お兄さんは出撃の準備をしてください」

つて、おい！それじゃ理由がわからんぞ！

「どうしたのですか、お兄さん。そんな不思議な顔されても風にはわかりませんよ？」

「いや、ちょっと待つんだ。何故俺が出撃の準備をする必要があるんだ？賊討伐までは後1週間あるわけだが、何か別の案件でもあるのか？」

来週攻める予定だった賊軍が動き出したとか、そんなことだらうか？一番可能性がありそうなのは、その賊軍に隣街が攻められて救援要請を出してきたとかなのだらうが。

もしそうだとしたら、前は門前払いをしていたのに豪く厚顔無恥な話ではないだらうか。

「お兄さんは、南東にある隣街を御存知ですか？」

「ああ、知っている。先月かな？華琳たちと賊討伐に向かつた先がその南東の隣街だったからな」

「その隣街ですが、賊によつて滅ぼされてしまったようですねー。それで避難民が華琳様の治める陳留へ向かつてきているとのことです」

なるほど、つまり避難民を保護しるといつわけか。

だが、どれだけの人数を保護するかは知らないが大丈夫なのか？

受入数によっては間違いなく陳留の経済状況を圧迫するだろう。

勿論、後々の成長を考えれば人口増加は好ましい話ではあるのだが。「ということは、避難民を保護する為に兵を出せとこいつことですか?」

「・・・ぐうー」

「寝るんじゃない!」とこいつが、この流れで寝れる余裕なんてなかつただろ!」

「お兄さんは細かいですね。保護するのも当然ですが、避難民を追つて賊軍が迫ってきているようです。戻候を放った結果、総勢4000がまだと言われていますね」

あれ?前の討伐戦では、根城に残っているのは2000名だとかつていた気がするのだが。

それが4000名まで増えている?

一体どこから湧いてきたとこいつのか。

「賊軍4000か。前にも4000名を相手にしたが、一体どこから兵が出てくるんだ」

「賊という存在が罷り通れば、民は容易に賊になります。彼らは搾取する側ですからね。その中には元隣街の者も含まれていると思いますよ」

よくもまあ、そつ易々と賊に変われるものだ。

それでいて民を襲つことが出来るなどと・・・昨日まで近所だった奴もいるだろ?」

「やれやれな話だな。ともあれ状況は理解した、至急出撃の準備に移る」

「よろしくお願ひするのですよー。風も風で準備があるので、また後でお会いしましょ?」

なかなか思い通りにはいかないものだな。

予定より1週間早い出陣とこいつことで、騎兵全員に鎧が揃つていな
い。

それでは部隊としてムラが出来るから、騎兵は春蘭と趙雲で鎧を持つ者と持たぬものに別れて編成か。

どちらが優れた騎兵を指揮するかで揉める事が容易に想像できる話
だな。

そして、それを仲裁する秋蘭も苦労するのだろう。

さて、俺も戦いの準備を始めるとするか。

前とは違ひ指揮官ではなく華琳の副官だが、それ故に尚更無様な真似は出来ないだろ?からな。

それに、武器も巧く隠さなくてはいけない。

形成によって戦雷の聖剣を具現化するのはいいが、何も無いところから武器が現れるのは拙い。

前は混乱状態だったから誰もが見落としたのかもしれないが、今回はそつぱいくまい。

予め具現化しておくか、もしくは箇のよつなものを背負つてそこから取り出すかのようにするか。

どちらでも構わないのだが、対策をしておかなくてはいけないだろう。

ま、基本は短剣を用いるから、聖遺物を使つ出番はないのかもしれないがね。

「戦としては一度目、副官としては初陣。足を引っ張らない程度には頑張るとしようか」

第十六話 決戦 前編

「ねえ、直衛。私は言つておいたわよね？私の聞き間違いかもしれないからもう一度聞くけど・・・貴方の馬は？鎧はどうしたのかしら？」

「いや・・・それはだな、華琳から騎乗の師事を受けたわけではないし、まだ手配するのは止めておこうかと思つて俺の分は他の者に回してあるんだ」

決して、馬に乗りたくないから先延ばしにしていたとかそんな事実はない。

確かに、華琳からは好きな馬を選んでよいと言われていたし、鎧は将官を優先に配備するようにと言っていた。

だから乗る乗らないは兎も角、準備だけは出来ていないと問題と言えば問題なのだ。

「そり。確かに、私の講義といつことで貴方を乗馬させよつとしたわね。でも、準備だけはしておきなせ」と言つたはずよ？」

「それは重々承知なのだが、賊討伐も近くてな。少しでも戦果を上げれるように、先に兵士に配つたんだ」

乗らないやつに配備するよりも、乗る奴に配備したほうが意味がある。

俺は馬に乗らずとも馬よりも早く走れるわけだから、そもそもいらないわけだしな。

「ま、今日はそういうことをしておきましょうか。今はそれほど遊んでいる余裕はないのだから」

俺は遊ばれていたのか。

ま、余裕がないのは確かだろ？ けどね。

今は隣街から来た賊を討伐しに行軍中であり、隣街からの避難民も保護しなくてはならない。

戦力差も前と同じく賊軍4000に対してもうち1000であり、4倍の戦力差がある。

打ち破るだけなら実績があるが、護りつつ打ち破るのはこれまた至難の業だろう。

何せ、避難民は軍隊と比べて圧倒的に数だけはいるものだから、錯乱でもされようものなら支障をきたすどころの騒ぎではないのだから。

「報告します！」のまま進軍すれば、半刻後には避難民に接触。更に一刻後には賊軍と接触するものと思われます。規模は4000、歩兵のみの編成です。

む、報告内容が距離ではなく時刻だと？

一刻は2時間、半刻は1時間。

避難民を接触した後、一刻後に賊軍と接触するとは思つた以上に余裕がなかつたな。

ところで、普通の斥候は到着時刻ではなく到着予想距離で報告してくれるのだが・・・それなりに知識があるといふことだらうか？

それに見覚えがない風貌をしていろし、彼女は一体・・・

「思つたより余裕がないわね。匪、貴方には避難民の誘導を任せると。無事に民を陳留まで送り届けなさい賊軍には私達が当たるから、後背を気にせずに頼むわ」

「御意！華琳様からの命、身命を賭して達成いたします

ただの斥候かと思ひきや、どうやら華琳と真名を交換しているようだ。

一体彼女は誰なのだろうか。

尋ねようにもそんな余裕はないだろうし、何より彼女は既に走り出していた。

移動に馬を用いていないことから、曹魏の将官ではないのわかるのだが。

「気になるかしら？あの子は樂進、隣街で義勇軍として戦つていたそつよ。今回の件も彼女が報告に来たからこ迅速に動けるわ。少し使ってみて、使えるようなじ将官に取り立てるつもりよ」

へえ、彼女が樂進か。

着々と魏を象徴する将官が揃つてくるわけだけど・・・これってまだ黄巾の乱が本格的に始まつていない段階だよな？

戦力過剰で俺の出番がなくなつてゐるよつた気がする。

「なるほど。ま、華琳の御用に適つたのなら確かな実力者なんだろう。だがどうする？ 彼女はこのまま進軍すれば、と言つていたが？」

今回の場合、このまま進軍すれば3時間後に賊軍と接触する。

これを利用して、華琳が避難民と接触した位置で停止すれば賊軍と接触するのはまだ先の話となり、浮いた時間を休息や待ち伏せに利用することが出来るのだが。

さて、華琳はどう采配を振るか。

「匪の報告通りに進むわ。民に被害を出さない為にも賊との間に距離を空けて置くことは必要でしょ？」

隣街から必死に逃げて来た彼らは既に限界を超えていふとも言つてもいい。

賊軍との距離を開けることで避難している民は安心を得るだらう。

実際に軍で護衛するという手段もあるが、それでは戦闘になつた時に被害が出る危険性がある。

傍に軍がいることでも安心するかもしれないがね。

「曹操殿、聞けば既に民は半刻にも満たぬところというではないですか。ですが、一向に行軍速度が上がる気配が見られないのはどういったお積もりかな？」

樂進との入れ替わりで趙雲が華琳の下に来た。

「どうやら鎧はお気に入りのようだが、なんとも歯痒い限りだ。

要件としては行軍速度に不満があるようだが……敵を前に焦れているのか？」

「悪戯に行軍速度を上げて民の不安を煽ることは出来ないわ。それに、合戦のときが迫っているのに無為に兵を疲労させることはできない。趙雲も隊を率いる身分だから、それくらいは分かっていると思うのだけど？」

「曹操殿の深謀、誠に感服する。が、我が騎馬隊も本隊と同等の速度で歩む必要はないのではないか？騎兵には騎兵の行軍速度があり、先に民と接触し、彼らを安心させたいのだが」

なるほど、先に向かう為の許可が欲しいといつわけか。

確かに騎兵だけであるのなら問題ない。

行軍は最も遅い部隊の速度を基準とする為、騎兵にとっては非常に窮屈である。

今回の件はそういった不満もあるだろうが、民を慰撫する名目としては十分、華琳も恐らく許可を出すだろう。

「なら、趙雲隊は先行して民を慰撫してもらおうかしら。けれど、くれぐれも先走って賊軍に当たることのないよう。」^{アリヤ} 謂の性能を実戦で確かめたい、と考えておられるわけではないのでしょうか？」

「確かに謎は素晴らしいのですが、隊を預かっておきながら勝手な真似はしませんぞ。それにしても曹操殿も気前が良い。聞けば謎は新技術というではないですか。それを密将の私にまで下さるとは謎も元々は門外不出のもの、今回のように密将である趙雲に渡したのは多少の論争になつた。

春蘭は密将である趙雲に謎を渡すことは出来ないと反対を主張。

稟は趙雲がいる間は謎を騎兵に配備を行わないと徹底的な守秘を主張。

風は兵に謎を配備する以上、趙雲に隠しても無駄であると賛成を主張。

秋蘭は謎が容易に造れることがあり、風と同様に賛成を主張。

これを聞いて、俺はよくもまあ考えるものだと関心していた。

華琳にも意見を聞いてみたところ

「趙雲ほどの将が謎を見てその利便性に気が付かないはずがないわ。だから趙雲だけに謎を渡さないという春蘭の意見は却下」

「選ぶなら稟の意見が妥当だとは思つけど、趙雲に敢えて謎を渡し

て器の広いところを見せてもら良いわ。それで趙雲が正式に仕官してくれるところのあれば、鎧を渡すことは何の問題でもなくなのだけど

華琳は正直どちらでも良い様な雰囲気だ。

俺の見解だが、ここで惜しんでも史実通りに行けば反董卓連合で諸侯に見せることになる。

だったら、少しでも鎧に慣れる事と趙雲への好感度上昇を見込んで渡したほうがいいと思つて・・・

「やつにえは、直衛はこの案件に何も意見していなければ、貴方はどうなのかしりっ？」

「・・・すまない。既に趙雲には鎧を渡してしまったんだ」

俺はこれでもかといつまじハリセンで頭を叩かれた。

といった経緯があるのは趙雲は知らない。

さて、華琳はなんと答えるのだろうか？

「あら？ 趵雲にほれからも私の下で指揮してもうつのだから当然のことよ」

「ははは、曹操殿にですか。既に稟や風が曹操殿に仕えていふといつのに私が必要と？ 実に魅力的なお誘いですが、今は戦争中、この話は何れ後ほど・・・」

「待つていろ。では趙雲、先に命じたとおり趙雲隊は先行して民を慰撫しなさい。彼らの山を越えての強行軍、その心労は計り知れぬものがあるでしょう。我が軍の威容を見せつけ、民の不安を払拭させるのよ」

「は。曹操殿の御命令、必ずや達成して参りましよう」

命令を受けるや否や、趙雲隊は駆けでいつたが……本当は、鑑の性能を一刻も早く確かめたいだけなのではないだろうか。

訓練と実戦では大いに異なる点もあるだろうから、実戦での性能確認は待ちに待つ機会に違いないからな。

「はぐらかされてしまったわね。ねえ、直衛。貴方は趙雲が私の下に来ると思うかしら？」

「趙雲は武に優れた武将であるのは確か。彼女に然るべき機会を『えれること』は勿論のこと、後は霸道といつもの彼女が認められるかどうかといったところではないか？」

兵を指揮して大軍を動かすといつものは、武官にして最大の名誉だろつ。

また、武に誉ある者であれば天下無双の称号を得たいと思つだらうし、精進したいとも思ひはずだ。

幸い、華琳の下では後者については十分満たされている。

前者に関してはこれから次第であるうが、密将の身で且つ全軍が寡兵でありながら隊を与つてているのだ、不満はないだらう。

趙雲が望むであろう環境は整っている・・・酒も華琳特製の物があるからな。

となれば、史実で劉備陣営に属した彼女が、華琳を主として認められるかという点に掛かっている。

「武官であれば、力無き指導者に統治されている民の末路を容易に想像できるでしょう。文官が現実から乖離した理想論者であるとは言わないけれど、彼らの多くは武を軽視する傾向にあるのは違いないわ」

「差し詰め趙雲は、理想と現実の間で揺れているのよ。彼女にもそれがわかつてている。だからこそ客将という立場で私の下にいる。理想が実現可能なものであるかを見極める為にね」

「尊王賤霸というやつか？俺は儒学に疎いがそれくらいは分かる。ま、第一に命だらうから霸道のが普通だと俺は思うけど」

徳を以て人民の心を獲得し天下を取る、これまさに王道である。

武を以て人民を掌握し天下を取る、これまさに霸道である。

ふむ、實に論争を巻き起しそうな話題ではあるが・・・

実際に今必要とされているのは武で間違いない。

民は生死の境目にあり、武を持たずして彼らを救うことはできないのだ。

あとは趙雲がいつこつた現実をどう捉えるか、といづ話。

「霸道が王道を兼ねる、つまりは霸王であれば趙雲も文句は言わないだろう。だから、華琳はこれまで通りに振舞つておけば十分なんじゃないか？」

「やうね。直衛の言いつとおり、これまで通りで問題ないでしょ。そつすればあの趙雲でも・・・」

とはいつたものの、華琳が本当に霸王を目指しているのかどうか気になる部分はある。

「う、なんというか、本当は【天下の女の子を独り占めにしたい】とか思つてるのではないか？」

普段の様子からすれば、一いちばんのほうが眞実な気がするんだよな。

「ま、それもこれも賊軍を蹴散らしてからの話だけだね。華琳、後世まで語り草となるような采配を期待していいのか？」

「ええ、勿論。だから直衛は私の采配をよく見て盗み取りなさい。以前のような想いをしたくないなら尚更ね」

先見の明がないのだから、華琳の言いつとおり一度はなによつにしなければならない。

思えばこの世界に来る前から見越しが甘かつた。

あのアンケートも知つてさえいれば、武力を100にする」ともなかつたのだ。

聖遺物が手に入るなら武力は1でも良かつたわけで、代わりに政治や統率を100に出来たのだから。

「やれやれ、これ以上後悔することのないようにしたいものだ」

だが三時間後、寡兵にて動いたことを大きく後悔する事となる。

田下に布陣する賊軍は騎兵1000を含む総軍5000。

華琳の率いる総軍1000を遥かに上回る5倍の兵力であった。

第十七話 決戦 中編（前書き）

未筆事項

1・桂花登場のイベント

桂花を出すタイミングを逸してしまった予感

次の拠点イベントらしきもので出せればいいのだが…
出せなければ袁紹陣営で参加予定

懸念事項

1・物語の進行速度

緩やかに前進… あればいいが少しも進んでいない

第二十話までに州牧に就任予定

反董卓連合など夢のまた夢

第十七話 決戦 中編

「華琳、俺の氣のせいかもしけないが、賊軍に騎兵がいるよつて見えるのだが?」

避難民と多少の接触を終え賊軍へ向かい行軍を続けたといふ、田下に布陣する賊軍は、斥候の報告とは違ひ騎兵を含んでいた。

しかも、たつた今到着した俺達とは違ひ賊軍は既に布陣を終えているときだ。

いや、一體これはどういふことなのか。

「言われなくとも分かっているわ。恐らく、騎兵の行軍速度を考慮して歩兵を先行させたのでしょ? だから斥候の報告には騎兵に関するものがなかつた」

騎兵はその行軍速度から歩兵の2倍から3倍までの速度を出すことができる。

いや、強行軍であればそれ以上の速度で行軍することが可能だ。

即ち、賊軍は騎兵の行軍速度を予め加味した上で、兵種ことに出陣時間をずらし到着時間を合わせたということになる。

「さつきとした数字は分からんが見た田だけでも1000近い騎兵がいるんじゃないか? こつちは・・・趙雲が率いる騎兵200のみで、とても勝負にならん気がする」

「そうね。こちらは総軍1000であり、賊軍は歩兵に騎兵を加え5000前後。歩兵だけならまだしも、こちらの総軍と同数である騎兵は非常に脅威。で、だから逃げようとも言うのかしら？」

「冗談、下がれるわけが無い。未だ避難民は移動中であり、撤退でもしたら彼らに被害が及ぶのは間違いないだろう。それに、この状況で潰走すれば敗北は必至だ」

立ち向かって勝てるかどうかも疑問が残るがね。

だが、賊軍にしては手の込んだ指揮をするものだ。

こちらが不利と見るや退却出来ぬように、彼らは敢えて民を逃がし、避難民としてこちらの足を引っ張る状況を作り出したのだ。

それに加え、総戦力を悟られぬよう騎兵を後出しで戦場に送り届けた。

騎兵1000といつ威圧感も相当たるものだが、何よりそれを前にして逃げ切ることは不可能に近い。

「だから敗北は許されない。必ずここで賊軍を打ち倒さなければならない。戦力差は5倍であり、敗北は必至とも言える状況でも、私達は逃げることが許されないのよ」

「既に援軍要請は行つたのだろう?ならば、後は時間を稼ぎつつ避難民を護ればよいのだが・・・」

既に陳留へ援軍要請を行つた。

寡兵での戦いは窮地に陥る原因となつたのだが、前回と同様に賊軍に挑むには訳があった。

前回は華琳が支配する土地でない為、他領主を無為に刺激することは出来ず、賊軍討伐という名目を掲げ、寡兵にて行った。

今回は華琳が統治する街の民ではない為、徒に他領主を刺激することができず、これもまた賊軍討伐という名目で寡兵にて救助を行つてゐる。

だが、ここに至つては賊軍の規模が大きく、また華琳が治める陳留にも近いため、他領主に対する配慮が不要になつた。

いや、現実には配慮する余裕がなくなつたといえる。

大規模に兵を動員することは、都におられる靈帝を刺激することになるだろ？が、こればっかりは仕方あるまい。

「陳留に残しておいた風と秋蘭には事前に命じておいたわ。万一に備えて援軍の準備をしておくように。だから、報を受け次第、援軍を率いて向かつてくるはずよ」

「強行軍で來たとしても間に合わんか？流石に5000名全員が戦力となるわけではないのだから、防戦一方であれば時間を稼げそうだと思わんこともないが」

戦場にいる将官は、華琳、春蘭、稟、趙雲と俺を加えて5名。

指揮兵数は、華琳と俺が本隊で300名、春蘭が歩兵で250名、

稟が弓兵で250名、趙雲が騎兵で200名。

この総軍にて賊軍5000を止めなくてはならない。

歩兵を止めるのはまだ手立てがありそつだが、問題は如何にして騎兵を止めるかといふ点だらう。

相手にするのは最前線の正面戦力。

歩兵の大多数は遊軍となるはずだが、騎兵に関してはその機動力から遊軍になり難い。

側面や後背を突かれぬように対処する必要がある。

「援軍到着まで持ち堪えるのが私達の仕事。幸い騎兵の機動力ではこちらが優っているのだから、これを使わない手はないわ」

騎兵には騎兵にて対処、全ては趙雲次第といふわけか。

いぐり曹魏の軍が精強であるとはいっても歩兵で騎兵に当たるのは自殺行為。

槍衾でも敷いて堅固に護れれば歩兵でも十分戦えるのだが、兵が少ないと言つ点を考慮すれば厳しいことには変わりない。

必然的に騎兵に当たるのは騎兵しか術がなく、歩兵に当たるのも歩兵になる。

賊は物量に優れるが質で劣り、自軍は物量は劣るが質に優れる。

ふむ、いつ評するか勝てる気がしてきた。

英雄譚といつものは大抵の場合、寡兵で質に優れた側が勝利するだろつ？

「趙雲頼みか。騎兵への対処も綱渡りだが歩兵も甘く見る」とはできんな。華琳、今回の賊軍に指揮官はいると思つか？」

「当然賊軍を統括する指揮官がいるのじよづ。迅速な行軍が可能である」とも、隣街の民を組み込んだ新設の軍を纏め上げるのも指揮官無しに出来ないわ」

総軍で500ともなる軍に指揮官がないなど到底考えられぬ話であり、聞くまでもないこと・・・

なのだが、その割には布陣がお粗末なのが気になるんだよな。

「指揮官がいる、確かにそれは俺もそう思っていたのだが・・・賊軍が布陣、あれは俗に言つところの方陣って奴じやないのか？荒野での会戦なら横陣や鶴翼陣を選択するのが一般的だと思ったのだが」

普通は正面戦力が最も多くなるように攻撃面積を多く取る。

横陣はその尤もたるもので、部隊を横一列に並べるだけのもの。

局所攻撃や分断攻撃に弱い陣形もあるが、基本的であり、またもな訓練を受けていない民だとしても運用上問題のない陣形であるといえる。

鶴翼陣であれば、本隊を中心には敷き両翼に騎兵でも配置する」とより、会戦時に迅速且つ容易に包囲殲滅を狙うことが出来る。

訓練を受けていない民が行つことは些か難がある陣形だとは思つが、両翼の騎兵さえ機能すれば問題なく包囲が可能である為、これもまた運用上は問題ない。

だが、何故か賊軍は方円陣をわざわざ敷いている。

待ち伏せなのにも関わらずだ。

「考えられることとしては援軍を待つているか、もしくは輜重隊を待つてゐるかといったところかしら？賊軍の行軍速度は輜重隊の行軍速度を遥かに上回つてゐるわけだから、後者が適当でしょうね」

「強行軍で進行したもののは、糧食が無い上に疲労困憊で仕方なく停止していると言うわけか。正規の軍隊ではなく寄せ集めの賊だからこそ起つたつる問題である」

なるほど、と言いたくなるがそれでも何か違つ気がする。

糧秣に関する問題は確かにあるような気がするが・・・それ以外の理由で方円を描いてゐる気がするのだ。

これは俺の勘に過ぎないのだが、なんというか方円の中心で誰かを崇めてゐるのではないかと。

いや、まさかそんなことはあるまい。

避難民の中に賊軍に慕われる者がいて、それを追つて賊軍が移動し

ていた？

そして目的の人物を方円の中心に据え、今までに崇めているだとか？
妄言もいいところでまつたく根拠の無い話だが、ふと思いついた推測が頭から離れない。

「どうやら当たりかしら？ 直衛も見てみなさい、彼らは馬から降りて方円陣を組み始めたわ」

華琳にそう言われ、再び賊軍の陣を見れば確かに騎兵が馬から降りて方円陣へ向かつて駆けて行く。

騎兵を1000名も用意しておきながら、馬から降りて歩兵と友に方円陣を組んで一体どうするといつのだ。

目前に俺達がいるにも関わらずそんな真似をするとは、本当に指揮官がいるのだろうか？

「んー、舐められているとか？ 俺の田たはそもそも眼中に無いこといつた風にしか取れんが」

「更にこちらに背を向けている者もいるわね。挑発としては実に効果があるものだけど・・・直衛、貴方はどう思ひうかしり？」

「先に言つた通り、こちらが眼中に無いのか。もしくは別の案件があるのか。遠目に見ているので正確にはわからんが、実は方円陣ではなく、中央に何かを据えて崇めているのではないか？」

「賊軍に別の案件ね。直衛の言つたことは兎も角、確かに今回の賊

軍の動きはおかしいわ。そもそも、彼らには避難民を襲う必要が最初から無い。既に街を襲って奪えるものは奪ったのだから、今更民を襲う理由がないのよ」

確かに華琳の言つとおりか。

避難民を襲つたところで得るものは少なく、それならば他の街を攻めたほうが余程有意義だ。

史実でいう、曹操が劉備を追つ展開である長坂の戦いのように、天下の霸権を賭けた理由があるなら兎も角、賊軍に明確な理由があるとも思えん。

あれこれ悩んでは見たが、彼らは無計画にも馬を追つただけなのだろうつか？

「賊軍の事情はわからんが、結局どうするのだ？彼らは馬から降りて呆けているようだが、攻めるのか？」

「脅威であった騎兵が無力化されているのはまたとない好機、攻める以外にないでしよう。趙雲に伝令を出しなさい。騎兵を以て敵の馬を無力化しようと」

馬さえいなければ相手は歩兵のみ、十分勝機はある。

何より騎兵の行軍速度でなければ十分振り切れる、つまりは後退する」とも可能ではあるのだ。

故に、騎兵の存在を散々危惧していたのだ。

「ここにきて打開策が見つかったのは運がいいとしか言ことづがない。

『』兵は敵兵が密集しているところを中心に斉射。本隊を含む全歩兵で敵軍正面を押さえるわ。直衛、期待しているわよ

「ああ、任せろ。俺が先陣を切って呐喊、兵らに進むべき道を示してやるわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5248z/>

恋姫無双で就職中！

2011年12月25日21時53分発行